

基督傳之轉機

柏井園

020557-000-5

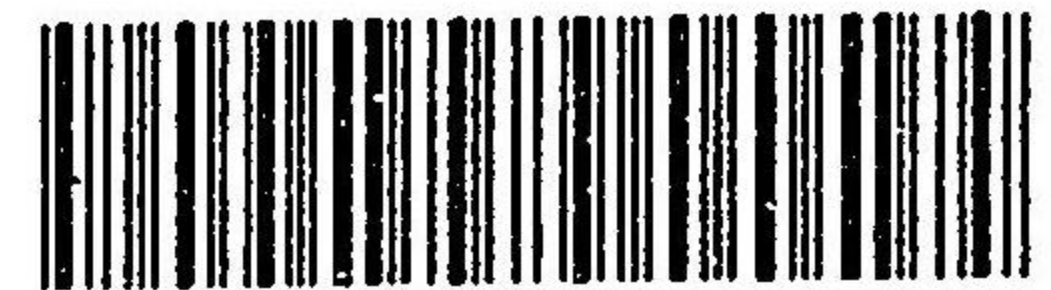
特53-307

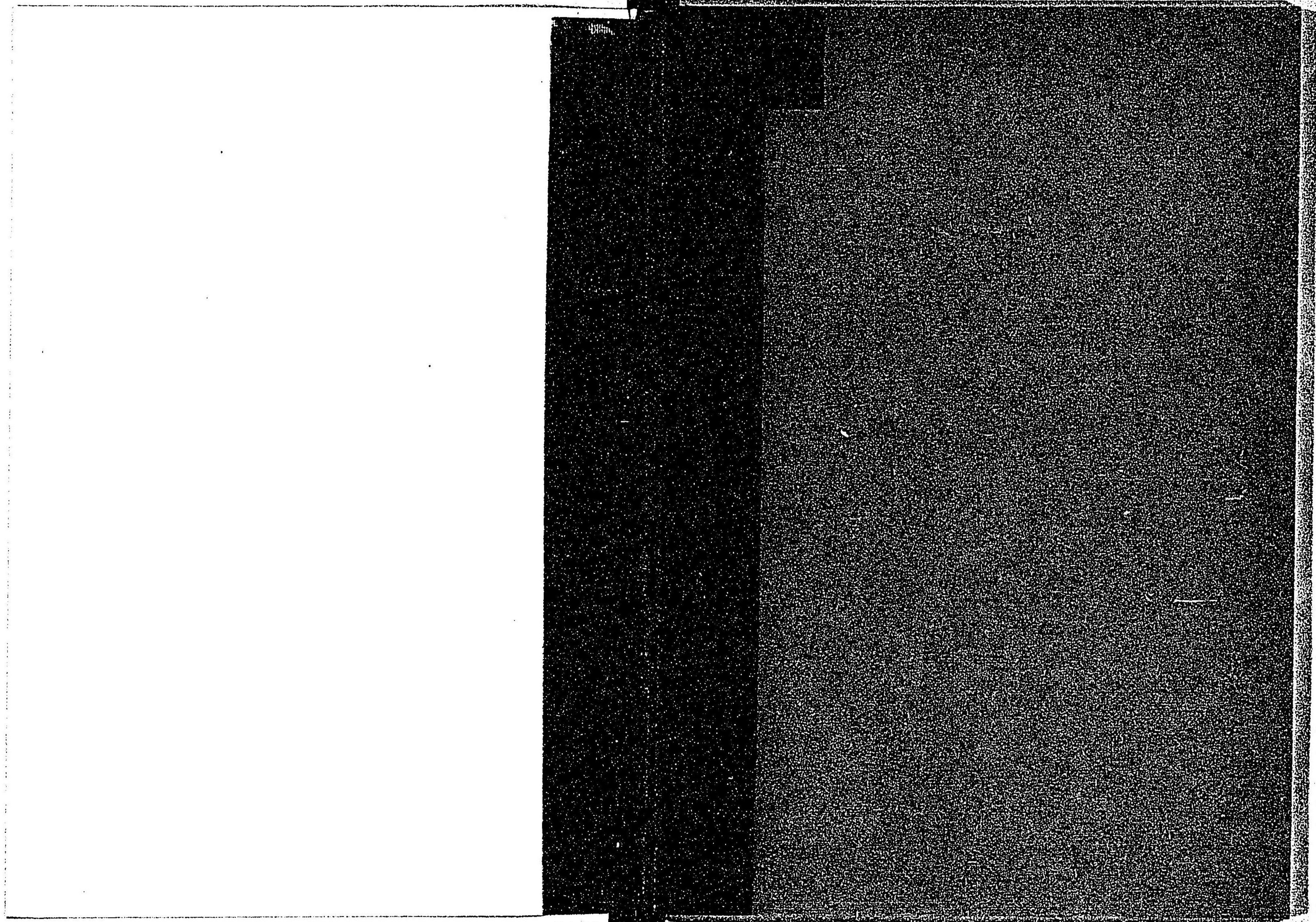
基督傳之轉機

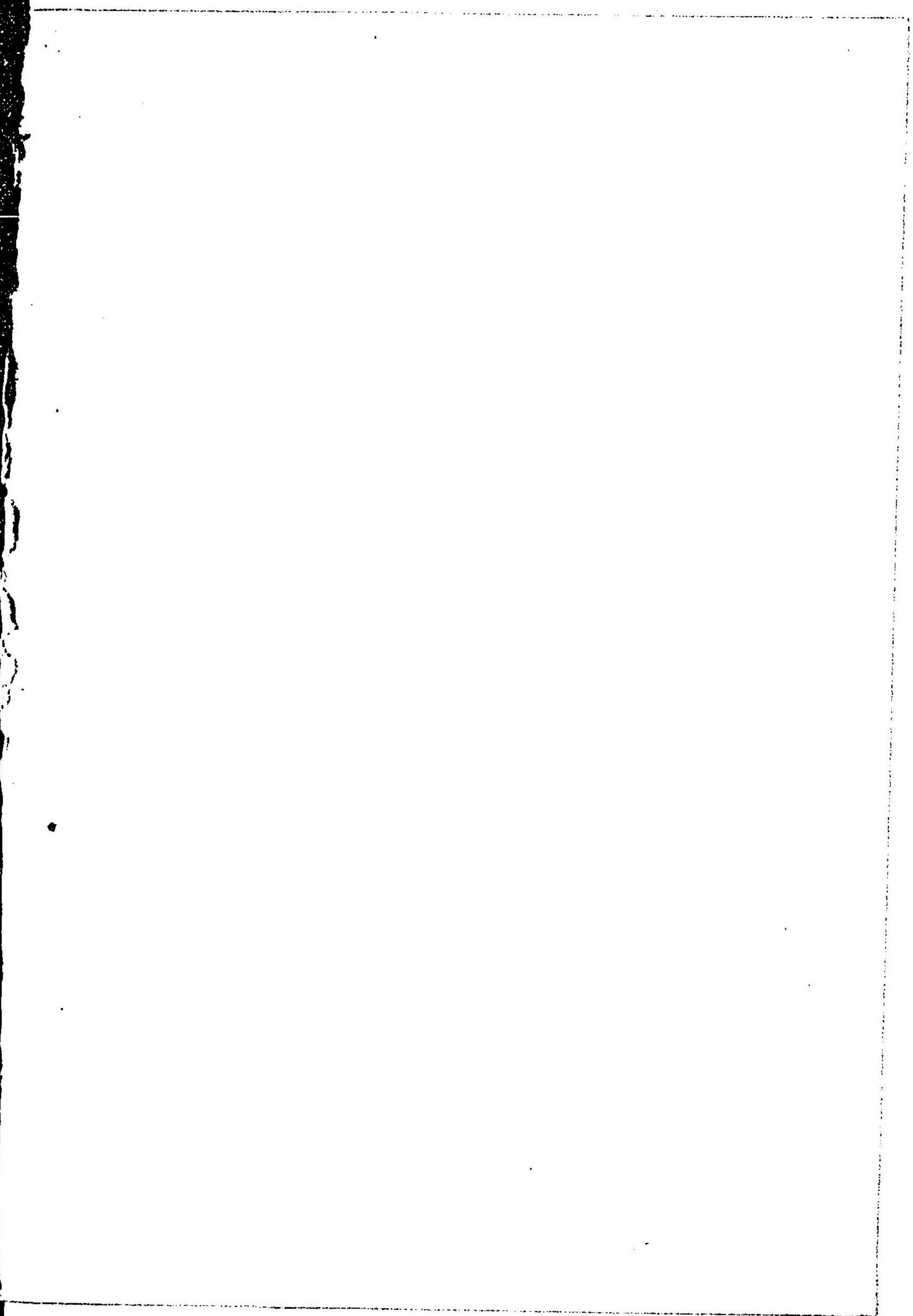
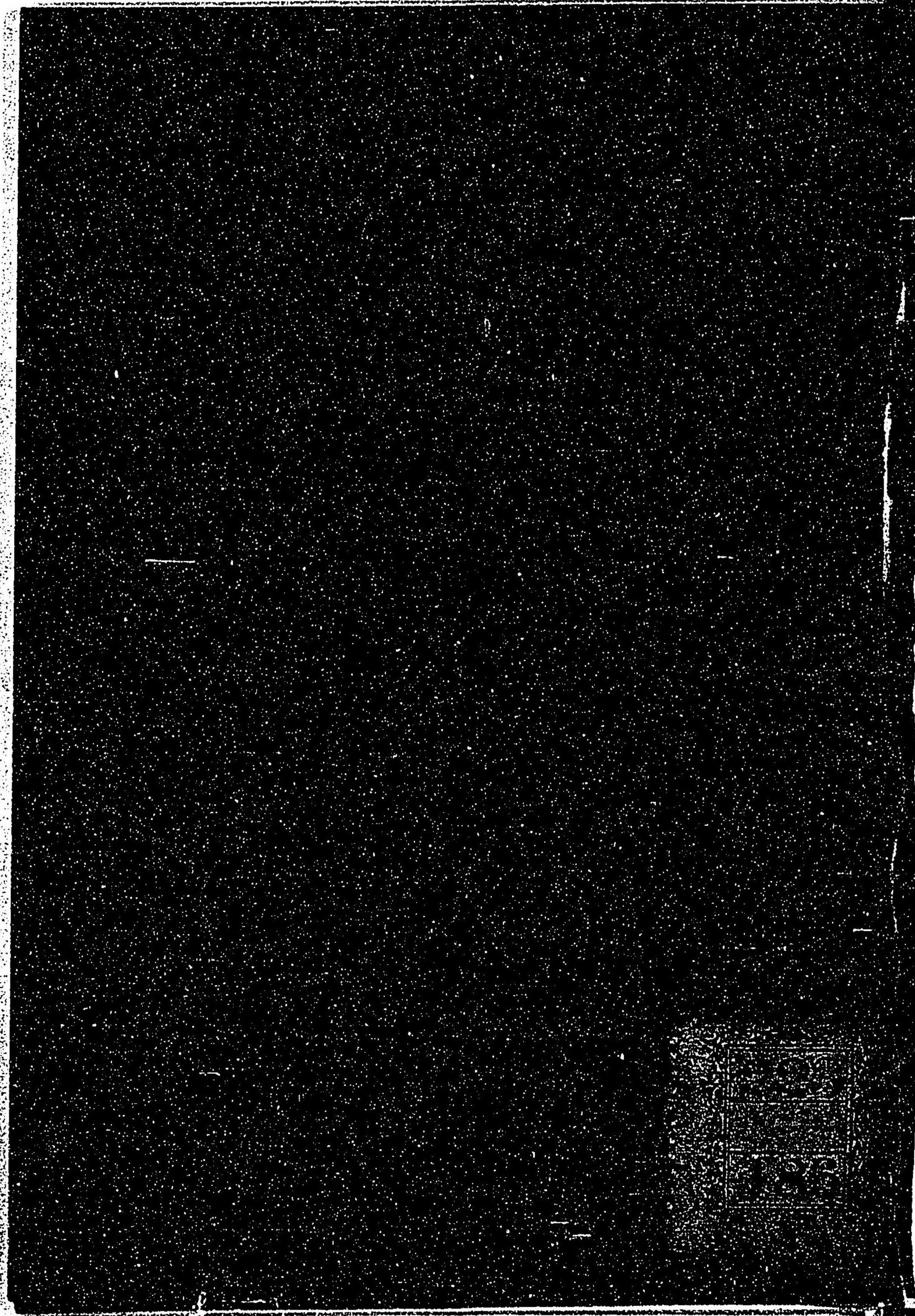
柏井園/著

M36

ABI-0370

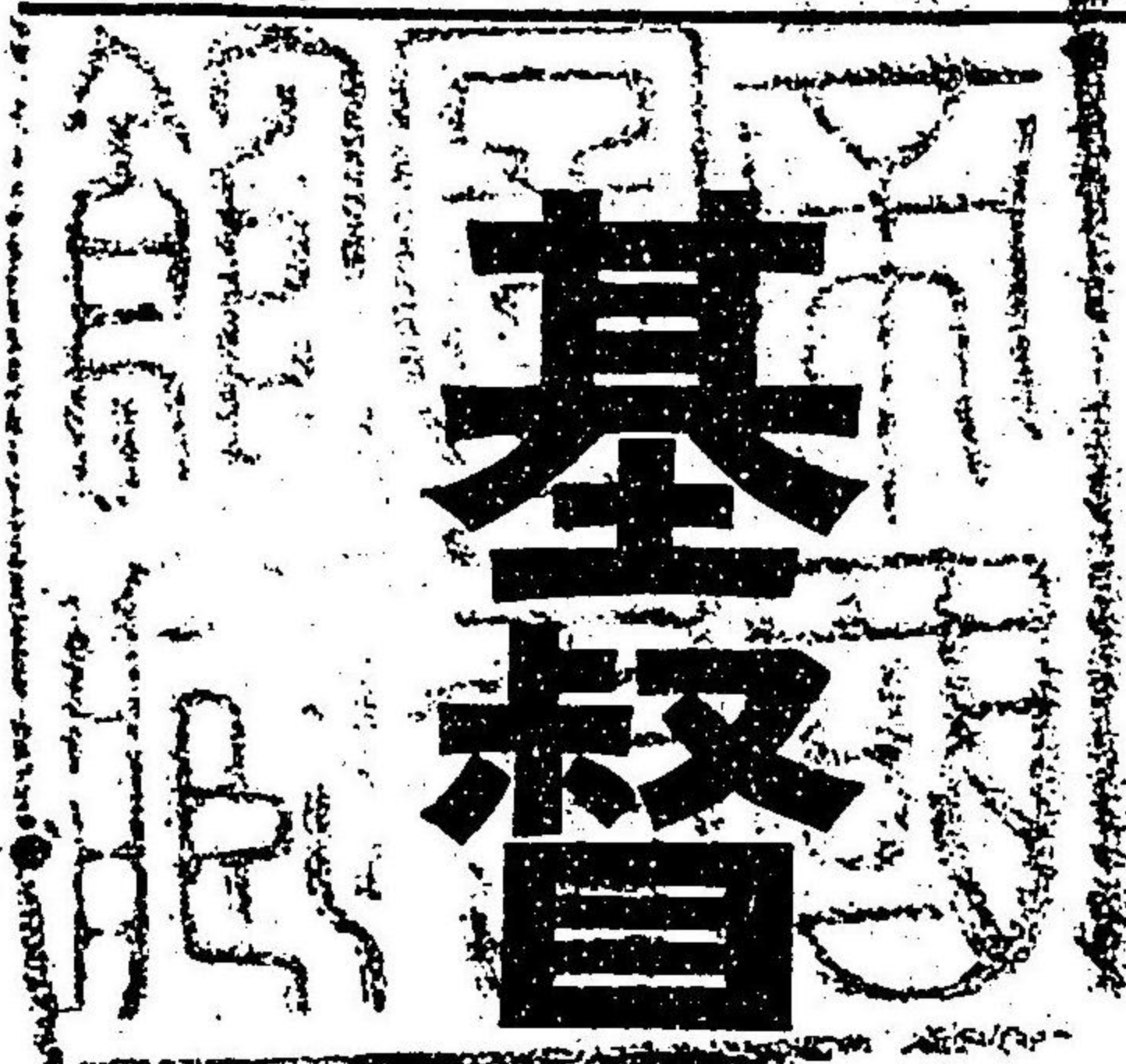






特53
307

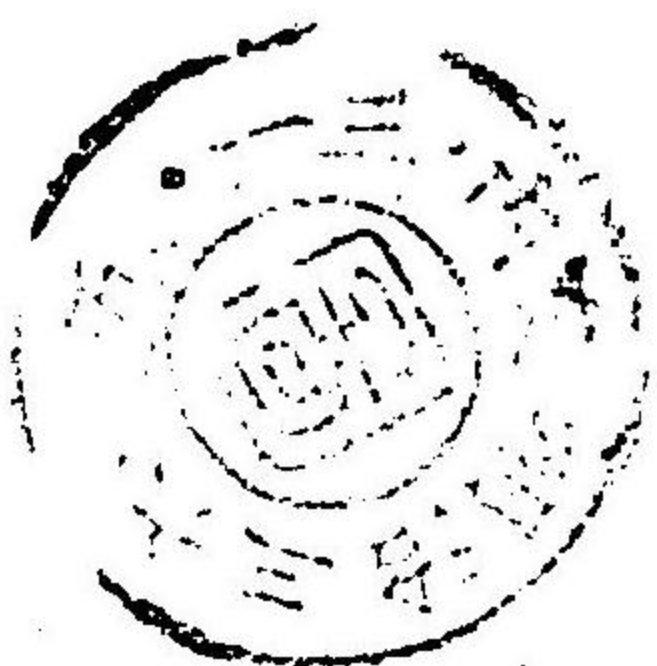
日本學生及基督教
書叢盟同會青



基督傳之轉機

柏井園著

東京 敎文館



終に基督の前に拜伏して、吾が主よ吾が神よと呼ばはりしものは、日夕ナザレの耶蘇とともに出入起居せる弟子等に非ずや。

基督論の諸問題は、基督傳の研究に由りて定まるの外無けん。一層適切に之を言へば、研究者其の胸襟を披き、赤誠と靈能とを發揮してナザレの耶蘇と交り、其の教訓を受け、其の感化を被ふり、其の要求に接し、其の同情に動かされ、其の神交默契の現在を感じ、其の萬民を牽くの力に觸るるに及びなば、基

督論は、其の問題の多くに於て、宛がら庵丁の牛を解くが如くに解釋せらるるを得べし。書齋の研究如何に科學的なりとも、斯の如く耶蘇に親近せざるときは、其の批評も、其の辨折も凡べて徒勞に歸せざるを得ず。

友人柏井園君其の品性、信仰、及び學殖に於て基督傳の蘊奧を闡くに最も適當の人なり。今や基督に關する議論紛々たるに當り、曩にロポルトソン、ニコルの著書を紹介せられ、今また自著基督傳の轉機を

世に公けにせんとす。之を歓迎するもの豈にただ君の友人のみならんや。予は此の大なる研究範圍に於て君が將來に貢獻する所益多からんとするを喜ぶ。

明治卅六年四月二十三日

福音新報社に於て

植村正久

緒言

斯の書の始の四章は昨明治三十五年の夏函根に開か
れたる夏期學校にて講じたるものなり。今基督教青
年會同盟より一卷の書として發行せらるるを機とし
て、之に改訂を施し且つ新に二章を加へて稍々首尾
の體を具ふることを得せしめたり。一小冊子と雖も
基督傳の研究の一助となるを得ば幸なり。

明治三十六年四月復活節の前一日

柏井園

目次

次	目
第一章	洗禮……………一
第二章	誘惑……………一八
第三章	カイザリア、ピリピの旅行……………三四
第四章	變貌……………五二
第五章	ゲツセマ子……………六六
第六章	十字架及び復活……………八一

基督傳之轉機

柏井園著

第一章 洗禮

基督傳の轉機とは基督の一生に現れたる回轉の時機にして英語にて所謂ターニング・ポイントの意なり。基督の生涯に斯の如き區劃回轉あることは福音書の中に其の跡を尋ね得べし。基督の生涯は晶然として一意透徹、毫も弛みなきは固よりなれども、其間自から始あり終あり春秋の季節に喩ふべき區劃ありて、詳に之を察すれば何人の生涯にも多少有り得べく又無かるべからざる回轉の機は彼の生涯に於て初め

洗

禮

(一)

て深く且鮮明に刻まるゝを見る。此は單に傳記の跡に顯るのみならず、基督親ら屢々『我が時』てふことを語られ、事を爲し身を處するに際して適當の時節あり局面ありて、神之を備へ給ふことを意識せられしが如し。

轉機は必ず連續に伴ふものにして、眞正の連續無き所に眞正の轉機あり得ざることは、天に太陽あり地球に一定の軌道なくば、四季の推移晝夜の循環あり得ざるが如し。基督一生の轉機甚だ鮮明なる所以は畢竟連續の緊密にして其の中心の一貫せるに因るなり。されば今基督傳中の重要なる轉機を中心として基督の生涯を研究すれば、自から其の連續を説くこととなるべく、此の兩側面に意を注がざるべからず。斯くて幾分か基督を知り、基督を知るに由りて亦人生の地圖を知るを得べけん。

得べけん。

基督の隠れたる三十年間の傳記は少しく歩を進めたる後之を回顧することとし、今直に彼がヨハテより洗禮を受けたる一條に就きて語らんとす。何人の傳記に於ても最も興味に富めるは、其人が自己以上の理想目的を發見し志を立て之に身を献ずる回轉機なるべし。基督教者が悔ひ改めて新生涯に入りたる所謂發心の時は即ち其にして、何人も自己の秘めたる傳記に於て回顧の念禁じ難きは其の一節ならん。此れ實に我が靈魂の進水式とも謂ふべき愉快なる日なればなり。基督の受洗は常人とは大に異なる所多けれども、全く別種のものにあらず我等の經驗を包含して一層高く深きものたることは以下研究するに隨ひ

て明なるべし。
 意味深き内部の経験を尋ぬる前に先づ外部の傳記をも考へざるべからず。凡そ洗禮を受けし場處や又人の如きは其人に取りては盡さざる追懷を伴ふものなり。ダンテの詩を讀むに彼が晩年謫客となりて異郷にさすらふ中にて一の切なる望は今一度懷かしきフロレンスの都に歸りて、昔し洗禮を受けたる會堂に參せんことなりき。基督はガリラヤの傳道既に終を告げエルサレムにて難に遭ふの日近づける頃、己が嘗て洗禮を受けたる地に退き暫く其所に留り給へることは約翰傳十章三十一節に『かくて復たヨルダンの外ヨハチの洗禮を施せし處に往きて彼處に居り給へり』とあるによりて明なり。此所に『復た』とあるは註解者の說に據れば遙に約翰傳一章二十八節に基督の受洗を叙して『此事

はヨハチの洗禮を施したるヨルダンの外なるベタニヤにてありしなり』とあるに照應せるものなりと云ふ。今昔の感深かるべき基督の心中を想像すれば、別に意義なきか如き地理上の記事も亦深き聯想を催さしむ。さてヨルダン河東のベタニヤとは如何なる處なりしか其跡今尋ぬべからず學者の説も一定せず。橄欖山上にもマルタ一家の住める同じ名の村ありき。ベタニヤとは棗の家或は棕櫚の家と云ふ字義を有すと云へば、ヨルダンの河畔或は其の支流に臨みて流水清く熱帶の樹木繁茂せし里なるべし。然して蘆の風に戦げる水邊の村も此時は決して寂寞たる寒村にあらずして宛がら戦時大本營となりし土地の如く、雜沓絡繹の場所となり、エルサレムの學者もガリラヤの野人も雲の如く集まれる、盛大なる光景に圍まれて、基督はヨハチより洗禮を受け

たるなり。余は今爰にヨハ子の事を説くに違あらず但だ多少諸君に興味ありと思はるゝ一事を云ふに止むべし、ヨハ子の事跡は獨り新約書に載せらるゝのみならずして、當時猶太の歴史家ヨセファスの史中にも見え、其の悲惨なる最期の事まで福音書の記事に符合せり。但ヨセファスの史に於てはヨハ子は單に宗教道德の革新者として寫され、新約書に於ては之に加へて耶蘇の先驅者、紹介者となれる方面に重を置けり。若しヨハ子の本領にしてヨセファスの傳へたる方面に止まらしめば、彼の生涯は寧ろ失敗の生涯と言はざるべからず、之に反して基督を世に紹介するの一事彼が帯びたる使命中の使命ならしめば、彼は遺憾無く其の天職を果たし得たる生涯なり。人の生涯が基督に繋がる繋からざるによりて成敗の分るゝ一例とすべし事實を是に見る。

夫れ基督の母はヨハ子の母とは親戚の間柄なれば相互の事を母より聞きしことあるべけれども未だ相見るの機會なかりしなり(約一〇三十一)然れども野に呼べる預言者の聲は遙にガリラヤの村里まで響きて其眞摯直裁にして人の良心に訴ふる聲は、これ決して『人より出でし』にあらざることを明なりければ、基督は乃ち三十年間閑居の生活を離れて活動の舞臺に現れぬ。

基督は何故にヨハ子より洗禮を受けたるや。こは先づヨハ子の問ひたる問題にして、今日の我等も亦基督に問はずんば満足せざる問題なり。ヨハ子の洗禮は悔改の洗禮なるに、悔改を要せざる基督にして、自己の無罪を意識したること明なる(他の言行によりて)基督にして、何が故に悔改の表章を受けしや。或は輕々説き去つて曰く基督自から

罪なしと雖も罪人に代るべき救主なるが故に之を受けたるなりと。これ固より然り、然れども基督は身を以て人に代るためとは云へ自己の本領を没却することあるべからず。俳優の技を演ずる如く人に見する意義あり自己に反りては無意義なる事を演ずるに至らば其の人の建てし宗教は根底に於て力を失ひたるものなり、此一點は我等が基督傳を解釋するに當りて忘るべからざる本義なり。故に其の受洗に於ても單に人の爲にするの意義あるのみならず、之と共に自から之を必要とし自己の意識に照らして満足する眞意義なかるべからず。余は其の解釋を求めて約翰傳十七章十九節にある基督の祈禱の言に得たり。曰く『我彼等の爲に己を潔む』と、夫れ基督は全く潔き者なるに何故に己を潔むるを要するか。これ即ち基督は罪なきに何故洗禮を受けたるかと云

ふと同一疑問なり、有力なる學者の解釋によれば、聖書に用ゐられたる『潔む』と云ふに二種の言あり。隨て二様の意義あり。一は消極的の意義にして罪を潔め汚を去るの意なり、一は積極的の意にして聖き目的のため、即ち聖き神に自己を靖献するの意なり。基督は消極的に自から潔むるの必要なかりしも積極的に自から潔むるの必要ありと彼は實に日々夜々己を潔めて神に献じつゝありしなり。是に於て洗禮を受けたる主意亦解し得らるべきにあらずや。洗禮は單に過去の罪を洗はると云ふ消極的の主意あるのみならず、自己を神に献じ新しき人となるを以て主なる意義となす。前者は後者あるが故に自然に發する結果なりと見るも可ならん。ヨハ子の洗禮とても單に消極的のものならざりしことは、彼の説教の標語によりて明なり、曰く『天國

は近けり悔改めよ』と。彼は曉鐘の如く人心を喚び醒すに足るべき高尚なる目的を掲げて國民の悔改を促したるなり。故に余は基督の受洗の目的はチャンデル等の説の如く、神の國の事業に身を献じたることを表すにありと信するなり。且つこの大主意は基督と他の人との間に共通なるべきものなり。

凡そ人は自己を與ふる時に於て最も大なり。否最良の自己てふものは自己を與ふる時に於て初めて發見せらる。これ一の逆説にして、生命を失ふもの却て生命を得るなり。人の發心には必ず二の要素あり、即ち自己を献ずること、自己を見出すことなり。此間の消息に至りては己を知るを以て警語となせる希臘の哲人と雖も未だ味ひ得ざりし所ならん。今や基督は自己を捧げたり。其の結果は如何。聖書に記して

曰く、耶蘇洗禮を受け水より上りて祈るとき、天開け聖靈鳩の如き状態にて其上に下りぬ、又天より聲ありて『汝は我が愛子我が悦ぶ所の者なり』と云へり。鳩の如きとあれば鳩と同じき形にてはなかるべく、或は玲瓏純白なる其光、白日に飛ぶ鳩の如く見えしなるべく、或はこれにはヨハ子の獨り見たる所にして耶蘇の靈を受けし其の狀の如何にも温潤光潔なりし形容なりと解するも亦不可ならず。兎に角耶蘇が洗禮を受けしに伴ふて、神の靈の感化を受けしと神の聲を聞きしとの二の事件ありたり。

儲この非常の現象に接して基督の心中には如何なる變化起りしや。多くの學者は耶蘇の救主的自覺はこの時に於て初めて興へられたりと説く。余は今基督の自覺に關する大問題に入ることを欲せずと雖も、基

督の傳記を明にする必要より少しく之に及ばざるを得ず。此等の學者の言ふ所に據れば、耶蘇は幼少より父なる神の愛を感覺し、神と自己との間に特殊なる父子の關係ありとの意識は漸々に發達し來りたり。然れども彼が救主即ち古より豫言せられ待たれたるメシヤとして世に來れりとの意識は漸次に發達せしにあらざ、パウロの召命と同じく一朝忽然として來りたり、時は即ち受洗の時にして、彼がメシヤの受くべしと約束せられたる靈を受け、且舊約書中メシヤに屬したる約束の言（詩篇二〇七、イザヤ書四十二〇一）天より聞こえたるに由て一朝豁然として我メシヤたりとの意識茲に開けたりと説く。然れども以上の説を以て説明し得ざる點少からず。イ耶蘇はヨハネが授洗を辭みたる時『姑く許せ』と云ひしを見れば、彼は常人と同じき地位にあらざる

を知りしと明にして、多少救主的自覺なくして云ふ能はず。これバイスも注意したる點なり。(ロ)我が愛子云々の聲は必ずしも基督の職分を知らしめたる言に限らず、彼と神との親密なる關係を表して彼に力を添ふる爲にあらざや。然らずば基督の救主的自覺既に明確になりたることは誰しも之を許すべき變貌の時に於て同一の聲ある必要を見ざるにあらずや。(ハ)基督は自己の死及復活の豫知を與へられたり。獨り生涯の一大轉機たる出來事に先ちて多少の豫知を與へられざるの理あらんや。(ニ)耶蘇は神の子たるが故に救主なり。早く神の子たるを識りて救主たることを全く自覺せざる筈なし。(ホ)耶蘇の兩親も亦彼の誕生の不思議に就きては或る齡に達したる後或る部分までは之を語り聞かせしならん。『イエス』てふ名に因みても必ず斯くありしこと、想像せら

る。

以上の理由によりて余は基督の救主的意識も洗禮以前より存したることを信ずるものなり。

然らば洗禮は基督の救主的意識と何の關係なきか。曰く大にこれ有り。ウオルツウオスが『ブレルウッド』の長篇に於て自己の詩想の發達を叙するを讀むに、天稟の詩才あることは髣髴として始より覺知し居たりしも、愈々其天職に身を献げんものとの一念發起の精神は或る一の時期に來りたり。その變化の生ずるに最も必要なるは意思の力の加はることなり。然らざる中は知識的に自己の召命を覺知せりと雖も未だ薄紗を隔つる如く、其目的は眞に自己の目的となりて全身の精力を喚び起すに至らず。機關盡く備はりて蒸汽力未だ加はらざる如し。此の力此

の機關に傳へらるゝときに生ずる大變化は即ち基督受洗の時にありたる變化なり。

基督は夙に救主的自覺ありしならば何が故に此時よりも夙く救世の事業に身を献ずる志を立てざりしや。ヨハテの出世を待ちたるも一の原因なるべけれど、主なる原因は一家の境遇責任にありしならん。基督は世界の救主となるべき準備として早くより一家の救主たる責任を與へられたり。彼の語りし譬喩の中にある如く十の邑を託せらるゝ前に一斤の金を以て商賣せしめられたり。父ヨセフは早く世を去りしなるべく便りなき母と數多き弟妹を支ふる責任は長子たる耶蘇の肩に落ち來れり。かのデヨン、スチユアルト、ミルが其傳を讀んで感涙禁ずる能はず初めて幾分か人生の眞味に接するを覺えしめたる、マルモンテル

と云へる人が父死して一家大なる不幸に沈みたる時幼少の軀を以て一家に生じたる空隙を塞がんものと思ひ立ちたる健氣なる志は此れ亦基督の志にてありしならん、家庭の境遇によりて教養せられたる救主的の慈愛は、彼が兄弟既に生長して漸く一家の係累を脱すべき機会を得たる後は、牧者無き羊の如き同胞人類の境遇を憐む慈愛となりしなり。耶蘇はヨルダン河畔にて罪の重負を輕められんとてヨハ子の許に來る多くの人を見たり。ヨハ子の説教は力なきにあらずと雖も、其施す洗禮は猶ほ水の洗禮にして、愛の火を以て人心を融かす力は之なきを見たり。人々の求むる所にしてヨハ子の未だ十分充たす力なき此の空隙を充たすものは誰ぞや。誰か世の罪を負ふ神の小羊たるものぞ。志立ち力加はりて復昔の我にあらざるを感ずる轉機は、カラライルが「サ

ルトル、レザスタス』の中に叙したる如き自己の大なるとを覺知する發憤より來ることあるべきも、基督の如く己を忘れて人の需要を酌み人の重荷を負ふ深切なる同情より來るもの更に高尚なり。この同情大愛に導かれて彼の生涯は一轉せり。

第二章 誘惑

基督に自傳ありとせば、野の誘惑の記事は其一節とも見るべきものなり。何となれば此の一事は基督の獨り自から經驗し給ひたる事實にして、基督の口より出でしにあらざれば材料の由て出づる所あらざればなり。基督は如何なる時此の深秘なる經驗を語りたるか知るべからず。或人は之を以てカイザリアピリビに於てなされし談話の際に語られたりと想像す。或は然りしならん。兎に角弟子の信仰幾分か是の如き消息を解し得べき程度に進みて且方に容易ならざる疑惑の爲に苦みたる時、教訓の必要より心に秘めたる實驗の一斑を漏らし給ひしものなるべし。

誘惑の記事を以て自傳的の歴史と見做さざる人なきにあらず。シエライエルマツヘルの如きは之を以て寓語の誤解されたるものなりと云ひ、ストラスは又例の神話説を用ひて之を説き去らんと試みたり。然れども他の靈的人物の傳記に照らすも此時期に於て此類の經驗あるべき内部的の道理あり。又聖書の記事を檢するも其の思想文章ともに聊も神話的の荒唐たる所又小兒らしき所無きこと、統一あること、他に比類なきことによりて其の架空の想像に出でざることを証するに足れり『エクセ、ホモ』の著者は良く此の點を明にせり。曰く『誘惑の記事は出所の如何なるに係らず、内部の意義一貫し、不實なるに似て一種他の摸し難き實意を有す。凡衆の想像力は豊富にして長く續がざるにあらざれども決して有力深遠なるを得ず。荒野の基督と云へる如

き事は探て以て想像の材料となし易き題目なれども之を材料として成
 功するには題目餘りに高尚に過ぎたり。想像の作り出だしたる所のも
 のは小兒らしき物語に過ぎざるを常とせるに反して、基督の誘惑の物
 語は彼の品性の如く獨絶無比なり」と。
 基督が誘惑を受けたるは何處の野なりしか、聖書には之を明記せざれ
 ども單に野と云へば特に死海の西岸にある猶太の荒野を指す習にて、
 基督がヨルダン河畔より荒野に退き又再びヨルダン河畔に行きしによ
 りて其近き處なりしことを想像し得べければ大抵ヨルダン河に近き猶
 太の野なりしを知るべし。馬可によれば其の處は人里遠く野獸の棲み
 し野なりと見ゆ。中世以來の口碑に其の地として傳へらるゝ場所はヨ
 ルダンの西約七哩クオランタナと名くる山にして平原上千二百呎乃至

千五百呎の高さを有し、東面はデブラルタルの海峽に似たる絶壁屹立
 して景色頗る森嚴なりと云ふ。
 基督は洗禮を受けて後直に野に往きしが、如何なる目的又精神にて野
 に入り給ひしやこれ第一の問題なり。馬可は簡約活潑なる一語を以て
 其消息を傳へて曰く「靈直に彼を野に逐ひたり」(英譯による)と。「逐
 ひたり」とあるによりて見れば耶蘇は必ずしも自から好んで行きしに
 ざるを知るべし。具に人の弱點を知りて「我等を誘惑に逢はせず惡よ
 り救ひ給へ」と祈ることを教へ給ひし基督は自ら亦好んで誘惑に逢は
 ざりき。但其の心に充つる大靈のために壓迫せられ一種驅逐せらるゝ
 如き勢を以て野に入りしを知るべし。靈の驅逐力は物質の驅逐力と異
 なれば強ち自由の意志を没滅するにあらず、却て中心の我の行かんと

して妨多き途を開きて眞の自由を與ふるなり。斯く強大なる衝動の制する所已まんと欲して自ら已む能はざる經驗は却て大人に有る所にして、ソクラテスはダイモンなる靈に役せらるゝと云へり。基督は洗禮の時受けたる神の靈に驅られ幾分退縮の情に克ちて寂寞の野に入れり。

偕又福音書には『悪魔に試みられんために野に行けり』とあり。然らば初より悪魔の誘惑を受くる目的なりしか、或はこれは結果より見て然か云へるにて、自から之を期せしにあらざして襲撃は不意に來りたるか。後の説を取る人は基督は受洗の時に立てたる決心の意義を一層明に熟慮し且つ今より着手せんとする事業の方針を立てんがために黙想の場所に退隱せりと説く。基督の野に退きたるに是の如き目的あり

しことは誰しも異論なき所なり。然れども果して單にこれのみなるか。基督は哲學者が哲學の問題を靜究する如き氣象にて行きたるか。或は勇將の戰場に向ふ如く且つ戦ひ且つ計畫する必要を期して行きたりしか。余は後の説を取らんと欲す。基督は世との戦を開始する前に先づ靈の決戦を試むるの必要あり。基督に於ては思ふは即ち戦ふなり。眞正の思想は戦なり。我等の思想の然らざるは思想未だ眞面目ならざればなり。既に戦ふと云へば縦し敵は如何なる方面より襲ひ來るべきや定かに豫測すること難かりしにせよ、陰々たる黒雲の頭上を壓して來るが如く早晚之と衝突せざるべからず。早晚衝突を免れずとせば『之を成し遂げらるゝまでの苦痛如何ばかりぞや』。如かず一刻も早く行くべき所に行きて黑白を判たんには。耶蘇洗禮を受けて後直に野に行き

しはこの故なり。

次に考ふべきは誘惑及び誘惑者の性質なり。之に就きては三種の説明あり、甲)これは本来超自然の事實にあらず全く歴史的の事實なるを是の如く理想化したるなりと。ランゲの如きはサタンは敎法院よりヨハテの許に遣はされし使者(約一〇十九)が更に基督を尋ねて來りたるものならんと想像したり。(乙)全く之を主觀的のドラマと解する説なり。(丙)之を客觀的の歴史とする説なり。第一の説は聖書の文章の調子と一致せず徒に臆斷を逞うする説なり。又縦し敎法院の使者來り功名の餌を以て基督を誘ひたることありと假定せよ。然らば基督が此の場合に臨んで依て以て去就を決したる標準は何時定まりしや。別に其の時ありとすれば終に誘惑の前に他の誘惑を設けざるを得ざることとなる。

乙説は一面の眞理を含むことは固より認むる所なれども、この誘惑を以て純然たる心裡の誘惑と考ふることは、我等が基督の品性につき有する所の信仰と相合せざる所あり。且つ他の所に見ゆる基督の敎訓思想亦是の如きものにあらず。基督はペテロに向ひて『サタン汝を索めて麥の如く簸はんとす』と云ひ、また路加傳十一章二十節より二十三節までを觀ても彼が客觀的に存在する強大なる惡の勢力を認めたるを知る。これは畢竟基督が自己の實驗に於て明に據る所あるが故ならずや。この故に我等は丙説に従て、惡魔てふ一個人格的の存在者ありて基督の誘惑は客觀的の事實なりと解するを以て最も良く聖書の文意に適合し、人生の經驗に適合し、基督の敎旨に適合することを信ず。

以上の如く解するにしても猶ほ聖書の文章は文字の儘に解すべきか。

將た之を表號的の者と解すべきかと問ひ得る餘地あり。之を文字通り
 の事實と考ふるにつきては種々の困難あり。其一を擧ぐれば、惡魔が
 耶蘇を神殿の頂に立たせたるは惡魔が強いて耶蘇を連れ行きしか、惡
 魔と雖も耶蘇に對して是の如き威力を有するの理無し。然らば基督が
 任意に惡魔に隨ひ行きしかこれも亦有り得べからず。故に余はこの事
 實の歴史的客觀的なるを信ずと雖も其文字通りなるを信ぜず。これを
 表號的の記事なりと信ず。委しく云へば耶蘇が實際山の頂或は神殿
 の屋根に登りたるに非ず、かく云へば最も言ひ顯し得るに近き經驗に
 出會ひたるなりと信ず。我等が音樂を聽きて或は大海の岸に臨むが如
 く或は高山の上に立てるが如く感ずるは幾分かこの經驗を想像する助
 とするに足らん。耶蘇は表號的の言を以て靈なる事實を語りたること

は他の所にも之あり。サタン^{サタン}の天より落つるを見たりと云ひ(路十六
 ○十六)、天開けて神の使等人の子の上に昇降するを見んと言ひ(約一
 ○五十六)、この世の主來る(約十四○二十)と云ふ如きいづれも表號的
 の形容にあらずや。
 以上は専ら誘惑の形を論じたりしが、之より進んで其の内容に及ばん
 とす。聖書に載せたる三の誘惑は四十日の斷食の後に來りたり。然ら
 ば四十日間は如何なる状態にて過ぎされしか。凡そ天下分け目の軍は
 一朝忽焉として開くるものにあらず。始めは孰れが徳川勢にして孰れ
 が大阪勢なるか分明ならず天下亂麻の如き間に時局は徐に開展して敵
 味方の區別明になるを常とす。精神的の戦に於ても之に同じく、始は
 孰か敵として戦ふべき誘惑なりや孰か味方として支ふべき主義なりや

糶糊として五里霧中に在り。この状態より進んで黑白の判るまでには言ひ難き煩悶なきを得ず、雷霆の轟く前には陰鬱の氣人を壓するが如し。四十日の誘惑は蓋し是の如き煩悶の間に過されたり。然して彼が混沌たる間より順序を見出し、執て立つべき方針略ぼ定まるとともに警戒を加ふべき危険亦漸く明瞭になりぬ。敵は敵、味方は味方と旗色既に判れたり。基督は此時一と安心せられたるならん。四十日の間餓を感ずるに到らざりしにその時初めて之を感ぜしるによりて之を察すべし。これ敵の最も乗じ易き機會にして、思ひさや天下分け目の大戦はさまで重大ならずと見ゆる方面より開かれんとは。余は之より三箇條の誘惑を逐次に解説せんとするにあらず。唯其の大體と相互の連絡を明にするに止めんとす。約言すれば第一の誘惑は自

意識より来る誘惑なり。第二(路加は馬太の二を三に置き三を二に置けども余は馬太の順序を取る)は神に依頼するより生ずる誘惑なり。第三は世間に關する誘惑なり。凡そ人生を経緯する要素は自己と神と世間の三勢力の外に出でず。この三者に對して正當なる關係を有するを得ば人の道は此に盡くと云ふも亦可ならん。人生第一の誘惑は自意識に訴ふる誘惑なり。肉の誘惑強からざるにあらざれども先づ乗ずべき門を開くものは主我心なり利己心なり。看よ主我的の誘惑の如何にして來るかを。曰く『汝若し神の子ならばこの石を麵包にせよ』。『ならば』或は『なる故に』の一語は誘惑者の好んで用ふる利器なり。或人は曰く我は天才なればかばかりの不道德は責めらるゝ譯なしと。或人は曰く我は國家に大功あれば安逸を貪るも可なりと。我は一書生な

れば云々と。得る時は是の如く慢じ得ざれば則ち怨む。其精神は同一なり。或人は思へらく我は是の如き才能あるにかゝる貧困に居らざるべからざるか。イスカリオテのユダは思ひしならん、我は弟子中の傑物なるに猶ほペテロ、ヨハネの下風に立たざるを得ざるかと。人の墮落も誘惑も不平も詮じ来れば多くは自己を評價して境遇と比較するより生ず。然して獨尊主義の氣焰熾ならざるにあらざれども歸する所は一塊の麵包以上に出でず。ユダの贏け得たるは銀三十に過ぎず。龍頭蛇尾は主我主義に定められたる運命にあらずや。マセソンはこの誘惑は麵包を興へよと要求する民衆の心に投じて物質上の救済を先にせよとの誘惑なりと解釋す。説き得て巧ならざるにあらざれども誘惑は常に之よりも身近き小事によりて起るを知らざる説なり。又已に第一の

誘惑に克ち得たる人のかゝり易き誘惑は他の極端に馳せ自己の思慮、分別、常識を離れて神に頼み、神殿の頂より身を投じて神を試みんとすることなり。自己を献げて神に事ふるは基督の教なり。然れども自己を殺すことを教へず。既に神より賦與せられたる才能あり天分あり之を活かし之し聖化して神に依頼する道如何。これ宗教的生活の秘機にして、一たび中正を失すれば妄信となり神療法の弟子となり或は功名心なく活動なき人となる。これ即ち神に依頼するの道を誤るの危険にして、基督が教を説くに當り人民の妄信的弱點に投じたらば、一時の成功は大なりしならん。然れども永久の得失は如何なりしぞ。又既に第二の誘惑にも克ち得て健全なる立場を失はざる人の免れ易からざる一の誘惑を餘せり、即ち世間の勢力と結托して靈なる國を立てん

とする誘惑にして、最も男子の雄心に訴へ易く、事業心を誘ひ易き誘惑なり。劔とコーランとを両手に提げて天下を風靡したるマホメットたらんとするか、十字架上の基督たらんとするか。

基督がこの三の誘惑に答へ之に勝ち得たるの道如何一々之を説く時を有せず、總括して云へば彼は聖書の言を記憶して之に勝ち得たり。(多くの誘惑が記憶より来る如く誘惑に克つる力も記憶に由る事多し。宗教的の生活に於て重すべきは記憶の靈化なり)。その聖書の言は孰れも申命記より出づるも亦注意すべきことならずや。申命記の著者の何人たるにせよイスラエルの建國者の苦心慘澹の精神を傳へたることこの一書に如くものあらず。今や神の國の建國者がイスラエル國の建國者の苦心に同情を求めたるは然るべきことにして、他年ヘルモン山上變

貌の時相語りたるモーセの姿は既に此所に髣髴たるにあらずや。

基督は神の國の大計を思ひて目前の誘惑に勝ち給へり。基督の生涯の誘惑に對する答にして十字架は最後の決答なり。彼は自己の爲に力を用ゐず、人の妄信を利用せず、世間的勢力に依頼せずして救世の事業に當らんことを決心せり。餘す所は人に代りて自ら苦むの道あるのみ、然して基督は之を取れり。この決心を揺かさんとする者は最愛の弟子の口より出づるとも實はサタンの言なりとして却けたり。

誘惑の野を出づる時、ナザレの靜平なる生涯は地平線下に隠れ、艱難多き前途を隔て、カルバリイ山上の十字架はほの見えしならん。

第二章 カイザリヤピリビの旅行

基督が誘惑の野を出て、カイザリヤピリビの旅行に至るまで二年餘の歲月を經過したり。耶蘇の活潑なる傳道の生活は其間に挾まることなれば彼の事業の轉機として擧ぐべきこと固より少しとせず。然れども今此等の歴史に割愛して直ちにカイザリヤピリビの事件及び其以前の旅行に及ぼむとする所以は獨りこの事件の意義重大なるが爲めのみならず、今日此の處に於て諸君ととも之を追懷するに殊更なる興味聯想に富める一段なればなり。此度の旅行は教育旅行にして即ち一種の夏期學校なり。大なる山、廣き海、風俗異なる外國の旅路の間に與へられたる靈的教育は次第に高潮に進み終にヘルモン山頭の變貌に到り

て絶頂に達したり。この旅行をなすに至らしめし以前の連絡は必要ある節に臨んで述ぶるとし今直ちに旅行の談に移らんとす。時は四月頃祝はる、踰越節と十月頃の構盧節の中間に記せられたれば夏若しくは夏前後の事なりしなるべし。基督は傳道の原野となせるカリヤヤ湖畔を後にして隣國のフ井ニシヤ指して出て立ち給へり。この旅行は常の旅行とは事變りて其目的傳道にあらずして専ら弟子の教育のためなりと知らる。フ井ニシヤ境まで大凡二三日の行程にして、途中にサフエト及びギシヤラ等の小驛市ある外は林樹茂れる山又谷にしてレバノン山を右手に望む。やがてフ井ニシヤ境の山を越ゆれば西には漫々たる地中海の波、紫布の産物を以て名高く世界の市場なるツロの繁昌其港に出入する國々の商船の帆影まで手に取る如く見渡さる。基督も

親しく外國の土地を踏み外國の風俗を目撃するは蓋し初度のことなるべく、特に年少の弟子の血は如何ばかり震ひ動さげむ。この時弟子と基督との間に如何なる問答ありしか知るべからざれども想ふに基督は『福音は天下の國々に宣へ傳へらるべき』ことを語りて弟子等の志を勵ませしなるべく、或はこの土地のために祈り給ひしならむ。(實に之より後三十年ならずしてパウロがツロに寄港せし時此處にも既にクリスチャンの二團體ありて彼を迎へたること使徒行傳に載せらる。) 偶々此里にて出會ひたる異邦の一人の篤き信仰は基督の心を喜ばせたり然れども此の新天地に傳道する愉快なる事業は弟子の爲めに將來に留め置かれて、基督生前の事業は『イスラエルの迷へる羊の外に遺はされず』と云ひし制限に満足せざるを得ざりし心中察するに堪へたり。

斯くて基督は此處より北に向ひ同じくフニシヤの要港にして硝子の製造を以て名有りしシドンを過ぎ更に方向を轉じてデカポリスに行けり。デカポリスとはガリラヤ湖東より東北に延びたる地方の總稱にして、地圖を按ずるにシドンより此處に達するに南北二條の道路あり。南の路はカイザイヤピリビを経て斜にデカポリスに出づる路なるがカイザリヤピリビへはこの後路を更めて行きしを見れば、この時は北の路を取りしを知るべし。果して然らばイエスの一行はダマスコに達する往來繁き隊商道を取りてバクトリナスといへる溪流の岸に沿ひてレバノンの一角を攀ぢ、海面上六千呎の山背を越えてレオンタス河の上流に架したる岩橋を渡りパレスチナの平馴なる景色とは全く相異なる奇絶な

る山川の間を過ぎぬ。ダマスコに入りしや否やは明記せられざれども、道の順より云へば多分この大都に立ち寄り寄られしなるべく、且つダマスコも亦デカポリス(十市の義)の中の都府なれば聖書に『デカポリスを過ぎて』とある中には此都を含ませたりと見るも妨なからん。ダマスコは當時東方のパピロン、ペルシヤ等の諸大國より地中海に出づる關門にして繁昌を極め猶太人も多くこの地に住ひて商業を營みたり。さすれば基督はこの旅行に於て東洋の三大都會なるツロ、シドン、ダマスコに足跡を印したるなり。此處より復た南下してガリラヤ湖東に出で、湖上に舟を泛べて南に渡り復た北に回り更に北進してカイザイヤピリビに向はむとす。爰に至りて試に既往の行程を回顧すれば自づから螺旋状をなし歩一步螺旋の中心にして最高點なるカイザリヤピ

リビ及びヘルモン山に近かんとす。地理的の行程彌や高さ處に登るともに教育上に於ても層々高さ水平に進まんとす。イエスは高さ教訓と高さ信念に導き上ぐる前に弟子をして先づ廣き天地を觀せしめたり。富士の高峰は廣き裾野を踏むて聳ゆ。高尚なる理想は狭き心胸に宿り難し。故に詩篇の作者は『爾我が心を弘くし給ふ時我れ爾の誠の道を守らむ』(百十九篇三十二、改正英譯に據る)と云ひしなり。基督は弟子をして精神上の大問題に接せしむる前、先づ彼等を伴ひてパリサイ人やヘロデー門の時めける豆大の天地を離れて廣き海、高さ山、人事活動の盛なる都會の空氣を呼吸せしめて其の眼界を大ならしめ氣象を正大ならしめたるは青年を教育するの用意實に深切なりといふべし。旅行中に教へられたる言は傳へられしもの妙きは惜むべきこと

なるが。傳へられし一を視ても略ぼ意の注ぐ處を視ふに足れり。耶蘇はガリラヤ湖上船中にて弟子を戒めて曰く「パリサイ人とヘロデの麴醉を謹めよ」と。麴醉とは何ぞや、主義にあらざ教理にあらざ氣風傾向に喩へしなり。パリサイ人の形式的宗教やヘロデ黨の世俗主義の排斥すべきことは弟子素より之を知れり。故に恐るべきは公然掲げられたる主義にあらざして、隱約に間に浸染し來る氣風なり。この卑俗にあらずば狹頑なる氣風の感化を脱するにあらずば、未だ與に精神上の大事を語るに足らず。旅行は是の如き目的を達するに最も適當なる教育の方法なり。

却説耶蘇がこれより行かんとするカイザリヤピリピとは如何なる土地なるか。此處は近頃此地方の分封侯たるヘロデ、ピリピが改修して居

都となしたる市にしてガリラヤ湖を北に距ること二十五哩なり。パンといへる希臘の神の祠あるを以て名高く原とパニマスと稱へしをピリピが名を改めたるなり。今日は復原の名に返りてパニマスと呼ぶ。この地はヘルモン山の麓に在りて海面を抜くこと千五百呎、ヨルダン河の主なる發源地にして清泉岩罅より涌出し橄欖、榭等の樹木繁茂し麥良く實り風景の美なることパレスチナに於て類少しと云ふ。馬可傳には、耶蘇カイザリヤピリピの諸村に行くとあれば目指す處は其の市にあらずして田舎にありしを知るべし。其處に着して後基督は人無き處にて弟子と共に祈禱したる後(九〇十八)此世にてなされし最も大なる談話は始まれり、ヘルモン山頭の雪白くヨルダン河源の水清き處にて。

其談話は諸君の知らるゝ如く耶蘇が先づ弟子に向つて自己に關する世間の評判を問ひしに始まれり。弟子が「人々は或はヨハ子或はエリア若しくはエレミヤの如き豫言者なり」と曰へり」と答ふるを聞きて彼は世間の思想全く我に好意なきにあらざれども要するに淺薄にして肯綮に中らざることを觀たり。是に於て一步を進めて局外者の評判より知己の判断に訴へて曰く「汝等は我を誰と謂ふ乎」と。蓋し此一の問は長く發せんとして未だ發せざりし所にして之を發するに當りて幾多の躊躇を帶び又決意を要せしなるべく、之を發して後如何ばかりの心配を以て反應を待ちたるや想ふべきなり。彼の胸底の鼓動は直に感情鋭く丈夫の孤心を觀取するの氣節あるペテロの胸中に同情の鼓動を發せしめたり。答へて曰く「爾は基督なり」と。(此れ馬可の傳ふる答に

して最も單純なるもの、馬太には「基督活ける神の子」とあり、路加には「神の基督なり」とあり) ペテロの告白に表れたる信仰は從來弟子の信仰に比して如何なる點に於て歩を進めたるか。耶蘇が基督即ち古より待たれたるメシヤなりとの信仰はこの時に至り初めて發したるにあらず。アンデレ初めて耶蘇に接して後ペテロに對ひて「我等メシヤに會へり」と云ひ、ナタナエルは耶蘇に對ひて「爾は神の子なり爾はイスラエルの王なり」といへり。第四福音書に於て然るのみならずして共觀福音書(馬太、馬可、路加の三傳を總稱す)に載せられたる洗禮者ヨハ子の言已に耶蘇をメシヤとして指示したること明なり。弟子等も或る程度まで此人をメシヤと思はずば萬事を抛ちて彼に隨ふことあらむや。然らばペテロの告白に

於て新しき點何處にありや。曰くこれ希望に止まらずして一の確信なればなり。初めの信仰は他人の蒔きたる種なり、今のものは自から根を下して結びたる果なり。彼はヨハネの紹介を聴き又初めて基督に接して起したる感覺なり。此は己に二ヶ年の間基督に親炙して寢食を俱にし其の言語を聴き其の品性人格に接して後達したる結論なり。且つ思へ耶穌は世間的の眼より見れば此の時失意の地位に立てり。彼が此年の春麴麩の奇跡を行ふてよりガリラヤの人は彼を推して首領となし政治的の運動を興さむとせしに、耶穌が之に應ぜざりしにより一度彼に隨ひしものも失望して去るもの多く、十二使徒の中にもイスカリオテのユダの如きは世俗的功名心の酬いられざるに失望してこの時より苦々しき叛心萌し初めたるならむ。この危機に際し獨りペテロ等の

深厚なる個人的愛着心と艱難を俱にすべき俠骨と『主よ我等は誰に行かん永生の言をもてる者は爾なり』との敬仰の念は彼等を救ひたり。ペテロの告白は丈夫の涙を含みたる告白にして縦令當初の信仰に比べ外形は依然たるにもせよ其の裡に流通せる血液如何に異なるよ。基督の教は既に彼等のものとなれり。その信仰は未だ熟したるものにあらず。耶穌を以て『我が主我が神』と信ずる信仰は復活の後に至らば十分に見るべからざれども、此の高き信仰に飛揚すべき羽翼既に成れり。されば耶穌はこの答を聴きて喜び中より發し稱賛の辭を興へて曰く『ヨナの子シモンよ汝は福なり血肉汝に示せるにあらず天に在す我が父なり』と

之より進んで耶穌はこの信仰を基礎としこの信仰の立ちたる人を基礎

として教會を建つべきこと、又彼自からエルサレムに於て人の爲めに殺さるべきことを教へたり。教會の建設と基督の受難とこの二大事實（寧ろ二大事業）は今まで耶蘇の心中に秘めて未だ會て之を口にすることをなかりき。基督の事業と死（事業中の事業なる）は彼の人格に關する信仰定まりて後初めて解せらるべきものなればなり。余は今爰に教會なるもの、意義及び教會建設の思想の發達等を語る時を有せず、又基督の受難の前知に就きては次回に基督の變貌を説明する時に於て之に及ぶこととすべし。唯爰に注意せんとするは基督の弟子を啓導して靈界の秘奥に入らしめし順序なり。前に云へる如く基督は自己の人格に關する信仰を質して然る後其の事業に及び之より更に歩を進めて基督の弟子たるもの、當に則るべき道德上の原則を説けり。夫れ『我

に従はむとするものは己を捨て其の十字架を負ひて我に従へ。生命を全くせんと欲するものは之を失ひ我が爲めに其の生命を失ふものは之を得べし』との教訓は基督教的生活の最大法則にして味究りなき秘義なり。パウロの如きも深くその秘義を會する所ありたりと思しく羅馬書第六章に於て力をこめて之を説明したり。夫れこの大原則をば基督は何が故に初より教へざりしや。山上の説教に於てもこの點は未だ闡明せられざるは何故なるや。此れ大に理由あることにして基督の與ふる訓誡法則ともに世の倫理學者の立つる如き抽象的の法則にあらずして基督の生と死の事實を模範とし理山となし原動力として立てらるべきものなり。宛も舊約時代の豫言者が常にイスラエルの祖先の歴史に現れたる神の作爲に原づきて救拯を説き恩恵を説きたるが如し。基

督の生と死を了解し、否此の大事實が我等の心に充滿するに至らば其中に自から道徳の法則あり生活の理想あり。基督の死は時の順序より云へば最後に來るべき者なれども信仰の歷程より云へば最初に之を了解すべきものなり。今日の我等は幸にもこの順序に隨ひて教を受くことを得れども、如何せん耶蘇在世の間の教訓は然ること能はずして時の順序に束縛せられざるを得ず。想ふに此れは耶蘇の弟子を教育せらるゝ際に最も遺憾に思はれしことなるべし。さればこそペテロの告白により弟子の信仰幾分か定るを知るに及びて、待ちに待ちしかの如くに自己の受苦と死と復活を預言し之に基きて教を垂れ給へり。後に來るべき事實を前に移すに由なければ已むを得ず事實の預言によりてこの目的の幾分を果たすを勉められしと想像して大なる誤りなかる

べし。然して猶更に以前に溯りて考ふるに、耶蘇が明に死を預言したるはカイザリヤピリピを以て初とすれども實際上教訓の必要ありて隱約の間にこの消息を漏らし給ひしは之より先にも之ありき。例へばニコデモに向て新に生るべきことを説きし時『地の事を云ふに汝信せずば天の事を云はん如何て信することを得んや』と云ひながら話緒漸く深く進むに隨ひ『モーセ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし』とて自己の死を暗示せり。新生は地の事なり、耶蘇の降世と死は天の消息なり。然れども新生てふ地の事實の有り得べき道理は、神の子の世に降り死して復た甦る事實より發するにあらずや。又耶蘇が麵麩の奇蹟を行ひたる後ガリラヤ人の惑を解きて靈的信仰に進ましめんとし

て『我は眞の麵麩なり』との主意を説き示せども聽く者は其の眞意を

解するに苦みたり。これ専ら彼等の思想の程度の低きに因れども、一にはこの教も亦耶蘇の死てふ事實に照らさずしては徹底し難き所あればなり。基督は何が故に人の麵麩なるや。其の意義を究むれば『人の子の肉を食ず其の血を飲まざれば汝等に生命なし』との秘密に到達せざるを得ず。故に此の時の教も亦生命の麵麩の教に始まりて死すべき救主と救るる人との關係に終れり。パウロは此深秘なる關係を説きて『我等其の死(耶蘇の死なり)に合ふ洗禮を受けて彼とともに葬らるるは基督父の榮に由りて死より甦へられし如く我等も新しき生命に行むべき爲なり』と云へり。パウロの説明は耶蘇の死を既に在りし事實として掲げ得るが爲に説き得て明白なり。基督の説明は未來に屬する事實を根據とするを要するが故に深秘ならざるを得ざるは自然の勢なり

且つ耶蘇の死てふ事實を解し難からしむる原因は獨り此が未來の事實たる故のみにあらずして、ペテロの告白したる、耶蘇が救主たりとの信仰と彼が苦難を受けて死すべしとの事實を調和するの困難に存す。永遠にタビテ王の位を占むべしと思へるメシヤが辱しめられて死すべしとは何事ぞや。ペテロが耶蘇を諫止したるは必ずしも告白したる信仰を言下に忘れしにあらずしてこの信仰より推しても基督の言を解するに苦みしなり。この調和し難き二の事實を調和するものは復活の一事なり。是に於て彼は死に併せて復活すべきことを預言したり。然れどもこれも未來の事實なるを如何せん。若し之を補ふに現在の事實を以てせば幾分かこの深秘を聞くに至らん。是に於て變貌の事實あり。

第四章 變貌

多くの人の傳記を讀むに、其の前半生は波瀾多く感興深しと雖も、一度後半生に移りて地位職業略ぼ定まるに及びては、功業の傳ふべく或は榮枯の跡觀るべきものある外、一個人としての内部的な生活は概して冷靜平板に歸し、復た讀者をして胸底の鼓動を以て之を讀ましむべき者少し。夫れ果して人生の轉機は其の發程にのみ有るべきものにして、頭髮霜を雜へて後は之あるべからざるか。春の花獨り麗くして秋の紅葉に比ぶべき光彩は人生に見るべからざるか。基督の傳記は其の然るものにあらず又然るべからざるを教ふるものなり。基督の公生涯の始に受洗あり誘惑ある如く、其の終に近くに隨ひ變貌ありゲツセマ

手ありて内部的な生活は彌々色深きものとなる。始と云ひ終と云ふも其の間僅に三年を隔つるに過ぎざれども、前のものは世に出て、事を創むる際に在るべき經驗にして後のものは専ら一生の晩節にあるべき經驗なれば、其間に挾まれたる年月の長短はさまで重大ならずと知るべし。

此の變貌てふ事實のありしは前に叙したるカイザリア、ピリピの問答ありて六日の後なり。聖書には幾日目といふ如きことを記すること稀なるに爰には之を特筆せり。知るべし此の六日間は弟子に取りて非常に深き記憶を刻まれたる日にして基督が弟子の教訓に畢生の力を注がれし時なることを。

教訓の題目次第に高遠の域に進み耶蘇の何人なるやの問題より其の事

業に及び更に限り無き生命の談話に入らんとするに當り其の背景は靜雅なるカイザリア、ピリピの村落より崇高なるヘルモン山上に移されたり。ヘルモン山とは明に聖書に記されず。或は之をガリラヤのタボル山なりと假定す。然れどもガリラヤを經過することは之より後に記されあると、タボル山の上には當時城市ありし故を以て多くの學者はヘルモン山を取れり。ヘルモン山は海面を抜くこと九千四百呎にして其頂は遠く黒海より見らるべしと云ふ。基督は必ずしも最高峰まで登りしにあらざるべし。路加傳には祈禱の爲めに山に登りたりとあり。多分夕方山に登り基督は徹夜して祈をなし弟子は眠漸く覺めたる早曉此の事ありと想はる。下界は朝霧に包まれて東方の空薔薇の色を染むる山上の曉は此の事あるに最も適したる場所又時にあらずや。

共觀福音書の記者が等しく記したる變貌の事實は果して現實なるや、將た幻覺なるや。之を幻覺なりとする學者少からず。其人々の理由とする所はモーセ、エリヤの如き幽界の人がこの世に現れしことは信じ難き話にして、且耶蘇はモーセ、エリヤ以上の人なれば彼等の示現を要せずといふにあり。然れどもこの記事の中に三の連続せる事實を含めり。一は耶蘇の容變りて衣白く輝きしこと、二はモーセとエリヤの現れたること、三は天より聲ありて『此は我が愛子なり』と云ひし事なり。此の三の事は孰れも現實にあらで幻覺なりと断定すべきか。然らば彼れの洗禮の時に聞こえたる同じ天よりの聲との差別何處にあるか。或は耳に聞きたるものは客觀的にして目に見たるものは主觀的なりと區別すべきか。これ亦專斷なる差別なりと謂はざる可からず。且

此の事は唯一人見たるにあらずして三人同時に見たることなれば純然たる主觀的のものにあらずして齊しく之を斯く見えしめたる外來の要素なかるべからず。ワイスは此は自然の原因によりて生じたる幻覺にあらずして直接神より送られたる幻覺なりと説明す。宛も幻燈にて寫す如く空中に懸けられたる幻影なりとの意なり。然れども基督は幻覺にて示したる事を事實なりと誤り思はしむる道理なく又必要なし。然るに弟子及弟子より聞ける福音書の記者は孰も之を幻覺なりと思はず事實として信せるにあらずや。要するに此等の解釋は超自然を避けむとして却て不自然に陥りたる解釋なりと謂はざるを得ず。基督は斯の如く不自然なる方便を用ひて人を教育し給はざるべし。然らば此事は全く客觀的超自然の出來事にして自然的に解釋すべから

ざる事件なりや。然り、然れども又頗る自然的なる方面あり。反復して之を言ひし如く基督一生の轉機は、人間普通の生涯にあり得べきことを最も深く根本的に實現したるものなり。基督の變貌は固より彼の神たる側面の發露したるものなり。然れども何人にも多少變貌の時あり、胸中に潜みたる罪惡の種全身に瀰りて墨を流す如く人をして惡鬼夜叉たらしむることあれば、時には又至善至美なる性靈爛熳として俗念塵のを洗ひ去り端嚴犯し難く感ぜしむるとあり。モーセがシナイ山を下るとき面輝きて面帕を着けたるが如き、或はステパノが其面天使の如くなりし如きこれなり。此等は皆自然の層階を攀ちて漸く超自然界に入らむとする際涯なり。否自然の中に充溢せる超自然力盛に發動し自然界の幔幕薄くして彼方に照り渡る光彩發越せる時なりと云ふ

べし。以上は寧ろ外面より觀たる状態なるが更に此の状態に在る人の心の裡に入り此時如何なる宗教的の經驗あるかを考へ見ん。宗教的經驗の種類一ならず。受洗の時の經驗あり、誘惑と戦ふ時の經驗あり、ゲッセマネの時の經驗あり。變貌の時に於ける經驗は如何なる種類のものなるや。一言にて云へば、最も高く引き上げられたる經驗なり、宗教の非世間的の側面に近接したる瞬間なりと云ふべきものならん。人は一部一局の事に就きて偏に訓練矯正を受くる必要ある時あり。即ち或る弱き局部に藥を投ずる必要ある時なり、基督が弟子の足を洗ひて謙遜の精神を教へ給ひし如きは是れなり。其時基督は教へて曰へり『浴したるものは足の外洗ふに及ばず』(改正英譯に據る)と。知るべし足を

濯ふ時あり又全身を浴する時あるべきを。全身を浴するとは、全く新なる局面の開かれたるを感じ全く新なる空氣に包まれ新なる眼を以て萬事を觀るの時なり。前者は寧ろ道德の領分なり、後者は純然たる宗教の天地なり。是の如く引き上げらるゝ實驗は弟子の教育の爲めに必要なりしは固よりなれども基督自身亦た之を要したり。基督の生涯は人に與へたる生涯なり。然れども自己の衷心に照應なく人の爲めにのみ演じたることなしと云へる根本の標準は此處に應用して過たず。されば我等は先づ基督がこの時如何なる點に於て引き上げらるゝを要したるかを考へざる可からず。

變貌の山は基督の生涯に於ける大なる分水嶺なり。東海道に於ける函

嶺の峠の如く一度之を越ゆれば全く新しき光景に入る。誘惑の野が靜なるナザレの生活と多事多忙なる活動の生活との間を劃するが如く、變貌の山は基督が活きて人を救へたる時代より死して人を救ふべき時代に移る嶺頭なり。我等は誘惑の野より遙なる前途にカルバリー山の見えしことを語りたり。然れども當時は只微茫の間に之を望み見られしまでにて、實際如何なる形状を以て現れ來るべきかは未だ分明ならざる節多かりしならむ。『新郎を取らるゝ日來らむ』といひ或は『モ―セ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし』と云ふを見れば彼が一死を期することは明なれど、其死が十字架上の死なることまで明なる智識は之を有せざりしならむ。或はマセソンが想像したるが如く、先づ基督の眼中に映じたるは十字架にあらずして昇天なりしやも知る

可からず。然れども前回に述しが如く事局の轉變は次第に彼の前途を狭からしめ(世間的に云へば)神の暗示は之に伴ひて苦難の内容を披き見せしめたり。此時に於て彼親から最も要する所は何ぞや。十字架は天に昇る階にして十字架に近づくは即ち天の榮光に近づくことなるの意識鮮にせらるゝことなり。是に於て神は昔モーセをしてピスガ山の頂よりヨルダン河を隔て、カナンの樂土を望み見せしめし如く、基督をしてカルバリー山を越えて天を望み見せしめたり。約翰傳を看れば基督自から死することを榮を受くることなりと云へり。死即ち榮なるとは變貌の山上に於て初めて明に觀得たる所にあらずや。十字架は此方より觀れば暗く見ゆれども天に向へる一面は曙の色を映せるにあらずや。テニソンがクラレンス公爵夫人の死を弔ふ詩の中に云へる

如く、
 葬の鐘の音の哀れさを天の使は華燭の夕の鐘にまして樂しと聞くら
 び、『死』の姿は生命の朝日照る方に面を向けて立てり。されば其の
 後ろ影を斯の世より見れば暗く見ゆるなり、『死』とは眞の名にあら
 ずして『上に行く』てふ名ぞそれなる。

是れより後基督は暫く十字架の暗黒面を見ることありとも又直に眼を
 轉じて光明の表面を望むを許されたり。彼が悽然として憂愁胸に満ち
 『今我が心憂ひ悼めり』と訴ふるとま天より聲ありて彼を勵ましたり。
 基督が觀たる天は如何なる天なりしや。エホバの榮光の満てる天なり。
 天使の音楽絶ゆる時なき天なり。然れども獨り其れのみならずしてモ
 ーセとエリヤの在る天なり、住居多き父の家なり、此世に蕾める花の

永へに咲き匂ふ天なり。タンテにとりてはベアトリチエと相會ふべき
 處、アウガスチンに取りてはモニカと相會ふべき處此れ即ち天なり。
 天の光は同情友誼の霞に映りて虹霓を架け渡すなり。その友多き天に
 於て聞く可き同情の聲は、知音寡くして寂寥を感ずること切なるヘル
 モン山頭に漏れ聞こえたり。

次に弟子の爲めに此事實が如何なる意義を有するかに至りては簡短に
 之を説かざる可からず。前に説きし如く基督は弟子を教ふるに抽象的
 の理法を以てせずして先づ大なる事實を以てし己むなくば事實の預言
 を以てす。然して此種の事實中の事實は復活にあらずや。復活は弟子
 をして基督の神たること死して猶活くることを信ぜしめたり。然れど
 も復活によりて弟子に與へらるべき教訓は復活前に於て多少與へらる

べき必要あり。然らずば如何にして將に來らむとする大失望大波瀾に堪へ得べき。之が爲めに基督は受難を豫告したるに併せて復活を豫告せり。然れども其豫告は弟子に殆ど何等の感觸をも與へざるなり。變貌は復活前の復活なり。變貌あり得べき身なればこそ復活したるなれ。復活は弟子をして基督の特絶無比なること、又彼が嘗に人間以上の者たり、メシヤたるに止まらず又我が主我が神たる事を知らしめぬ。變貌の事實の與ふる教訓も之に外ならず。ペテロは云へり『三の盧を造らせ給へ』と、其時天より聲ありて曰く『これは我が愛子なり之に聽くべし』と彼はモーセ、エリアの儔にあらず獨絶無比なる神の子なり。變貌は花なり復活は實なり。實の生るを待ちて花の意義は完成するなり。其秋までは情なき批評懷疑の冷風をしてあたらしこの花を散らさし

むる勿れ。微妙なる經驗は微妙なる注意を以て之を愛護し又培養せざる可からず。故に基督は山を下る時三人の弟子を戒めて曰く『人の子の甦るまでは汝等の見しことを人に告ぐる勿れ』と。

第五章 ゲツセマ子

ゲツセマ子の林暗くして我等の了解し難く又説明し難き深秘を其の裡に閉せり。然れども我等の裏に潜める靈覺は我等自ら意ふよりも却て良く此の一段の眞意を感得する力あるにあらずや。試に想へ若し基督傳の此の部分にゲツセマ子の一節無かりせば、此れ有るに比べて物足らぬ感起さざるべきか。此あるが爲に基督の生涯が如何ばかり人に近く感ぜらるぞ。基督の死がプレトリーの崇高なる筆を以て寫されたるソクラテスの死と異なる所以の一は是にあるにあらずや。我等が今ゲツセマ子の意義を考ふると云ふは即ち隱約の間に契會せる思想の緒を推し尋ねて、許さる境まで基督の足跡に追隨するに外ならず。

ゲツセマ子の園にて基督の心に發りたる大なる悲哀は何に原因せしかを考ふるに先ち、此の悲哀は如何にして來りしか、即ち如何なる聯絡又た關係より發りたるかを考ふるを以て順序とす。先づ誰しも異論なかるべきは佛蘭西の哲人ブレース、パスカルの説破したる事實なるべし。其の言に曰く『福音書の記者は何故に基督が煩悶に際して心弱かりし狀を寫せしや。彼等は從容死に趨く狀を描くことを知らざりしやと云ふに、能く之を知れり。路加の叙したるステパノの死は基督の死に比して遙に勇しきにあらずや。彼等の寫す所に據れが基督は死の未だ來らざる前には畏れたるに、一度死に臨めば却て坦然として勇氣を表せり。是れ他なし其の苦悶は内より發せしが故に、人の面前に立ちては却て泰然として動せざりしなり』と。すべて小人

の畏れは外物より發し、大人の畏は内より發す。基督に於て獨り然らざるべき。且つ是に到る以前の次第を考へ來れば亦其の然ることを觀るに足れり。基督受難前一週間の事を讀むに、胸底に踏れる悲哀の暗潮と云ふべきもの事に觸れて輒ち動けり。然して反對あり危険身に逼れる時よりも寧ろ喜びを感じ慰籍を受けたる後に於て此の波動ありしが如し。一週の始滿城を動かすばかりなる群集の歡呼に迎へられてエルサレムに入京する途中橄欖山より此の都に臨むべき悲しき運命を傷んで泣けり。又一日或る希臘人が彼を慕ひて來り訪ふに逢ひ欣然として之に接し、傳道の前途多望にして一粒の麥の地に落ちて實を結ぶに似たるを語りて希望に満ちたりしが、既にして又倏然として「今我が心憂ひ悼めり父よ此時より我を拯ひ給へと云はんか。否之が爲に

此れ此時に至れるなり」と云へり。嘗て弟子を戒めて、斷食する時頭に膏を塗り顔を洗へと教へ給ひしが、今や其の光明なる志を以て此の境遇に處すれども、脈々たる一片の愁緒内より發して斷ち難きものあるが如く、ゲツセマ子の前幾度か小ゲツセマ子ありしが、遂に最後の迫ること明になるに及びて此の波動益々大にして最も高く上りて又最も低く落ちぬ。其の最も高く上りし時とは何ぞや、最後の晚餐なり其の席上の教訓なり祈禱なり。此時耶蘇は云へり「我れ苦難を受くる前に汝等とともに逾越を食することを大に願へり」と。此の願は一朝一夕の思ひ立ちにあらざりき、約翰傳第六章の教を味へば、未だ儀式とこそならざれ其の主意は久しき前より心に藏められしを察するに足らん。彼は物靜なる春の夕物靜なる樓上にて年來の素願を果たし、併

せて眞意深情至らざるなき訓誡を留め、祈つて力弱き弟子を天父の愛護に托したり。最早心に残る隈もなく言ひ難き満足ありしならん。されば是に至り死して遺憾無かるべきか。若し武士道の死ならば、ストイツクの死ならば、ソクラテスの死ならば然かありしならん。然れども人の中の人として、救主として人情の底の底まで嘗め知る可き基督の踐むべき道は未だ此處に盡さず更に一層の深處に辿り入るべかりしなり。昔ヨセフが埃及に在りて不思議の縁にて其の兄弟（嘗て己を殺さんと謀り終に己を奴隸に賣りたる）に再會するや、埃及の大宰相たる威儀を崩さず儼然として彼等に應接したれども、一度其席を退きて獨居の室に入るや無量の感抑ゆる能はず聲を放つて泣けり。基督の涙はヨセフの涙とは固より同しからず、然ども其の坦然として爲すべき

事を爲し終りて後に獨り中心の孤情禁じ得ざりし次第は稍相似たり。此れ他無し人の爲に圖り人の爲に憂ふる務の未だ終らざる間は一片の暗影となりて心の一隅に盛められて己れも亦或は之ありと心付かざりし所の或る物が其の務の果たされし瞬間、堰下の潮の退くとともに堰上の水非常の勢を以て迸り出づるが如く、忽ち全心に横溢せるなり。聖書の記する所に據れば、耶蘇は弟子と偕に其處を立ち出でケドロン谷を渡り歌をうたひて橄欖山を登りゲツセマ子の園に近く時、曾て幾度か爰に祈りたるが此の夜にて名残となるべき此の園に近く時、悲しみ、畏れ、寂しさの情は一時に發りぬ。（此の事を記せる聖書の文章の日本譯は蓋し精密ならず、馬大馬可の文を同一に譯しあれども原文は同一ならず。兩傳とも二語を重ねて悲哀の状を表はせるが、第二の

語は兩傳同一にして第一の語は各相異なり。其の共通なる語は註解者の説明によれば沈衰孤寂の心事を表し、其他は馬太に於ては悲哀の意馬可に於ては驚き或は畏れの意を示せり。漢譯には馬太の文を憂愁哀慟と譯し馬可の文を驚訝哀慟と譯せるは寧ろ原意に近きが如し。然して他の弟子を留めペテロ、ヤコブ、ヨハナの三人を伴ふて林の中に入りしが、更に三人にも離れ跪きて祈て曰く『若しかなはゞ此時を去らしめ給へ』と又曰く『アバ父よ爾に於ては凡ての事能はざるなし此の杯を我より離ち給へ』と。然して路加の記する所によれば耶蘇は切に哀しみ切に祈り其の汗は血の滴の如く地に落ちたりと云ふ。

ゲツセマ子に到る順序は畧ぼ上に説きし如くなるが、我等は一步を進めて、此の苦悶は何の爲の苦悶なるや、此の祈禱は何の爲の祈禱なる

やを思はざるべからず。我等が基督の高貴なる品性に原づき又基督の傳記に就きて既に學び得たる所に照らして明に信じ得る一事は此れなり、基督は己が心のままに行ふことなく終始唯だ神意を成すを分したりと雖も、盲目に神意に従ひしにあらずして、條理を解し價値を認めて後喜んで之に適從したる事なり。約百が『彼れ我を殺すとも我は彼に依り頼まん唯だ我は我が道を彼の前に明にせんとす』と云ひし言は、痛切に人の至情を説破したる言にして神の奴隸にあらずして神の子なる基督に於ては必ず此の道を明にする所あるべきなり。左ればこそ誘惑あり變貌あり茲に又ゲツセマ子ありしなり。人或は云はん十字架は基督の豫てより覺悟せし所にして、死即ち天の榮に入るの道なることは變貌の山上に於て示されたるにあらずや。何が故に此場に臨

んで躊躇し狐疑せしやと。然れども大事を思量し且つ處決するには適當の機會あり。固より去就進退の大義は平素自から定まる所あるべしと雖も、自己の身の上の事ながら幾分か客觀的に之を想ふと、愈々之に觸接して其の中に身を投ずるとは差別なきを得ず。面のあたり此の問題に接して最後の解決を與ふるには必ず相當の時機を擇ぶべく又時機は與へらるゝなり。基督は嘗て『一日の苦勞は一日にて足れり』と教へ給ひしが、適用すべき方面は多少之と異なれども、萬般の問題苦心が日々念頭に叢りて其間に先後緩急の順序あらずば、人何を以て之に堪へんや。況して基督の如き透明なる前知を與へられたる人にして併せて此の餘地を與へられずば其の生活果して如何にあるべき。故に十字架の覺悟は疾くより之ありき、然れども最後の解決は未だ之あら

ざりき。最後の解決とは何ぞや。ゴデーの謂ひし如く『十分なる意識と自由を以て十字架を承諾すること』此れなり。承諾なく自由なくして餘儀なく負はされたる十字架は未だ完全なる十字架にあらず。不完全なる人間には之も亦必要にして尙ぶべきことあれども、基督の十字架は然かあるべからず。又少しく別の方面より考ふるも、建築者の家を建て、彫刻家の像を刻むや模型先づ方寸の裡に形成せられて後工事に着手す。慘憺たる經營の後模型心中に成りし時工事は半ば成りたるなり。聊が類を失する嫌あれども十字架を一の工事とすればゲツセマ子は摸型の成りし時なり。犠牲は十字架にのみ在りと思ふ勿れ、犠牲の一半は既にゲツセマ子にあり。

ゲツセマ子は最後の解決を與ふる時機にして、此時に此事あるべきこと

とは既に之を説けり。然して此の解決を與ふるに臨んで彼の如く大苦悶ありしを見れば、この解決即ち承諾をなすに大なる困難疑惑ありしを察すべし。其の困難其の疑問は何ぞや。蓋しこれ義しき人義しからざる人の爲に死するに伴ふ困難疑惑なりと想像して大なる誤なかるべしか。夫れ人の爲に苦み人の爲に死するは絶対的に爲し難き事にあらず。其人の爲に苦んで其人の爲に感謝し、若しくは其人の骨肉知己之が爲に喜ぶものあれば、一片の義氣我を驅りて死を甘せしむる力あり。然るに人を愛して其の愛酬ひられず、人の爲に苦んで其の苦衷に感ずる人なくば如何。此れ實に忍び難きことにあらずや。彼のミカエル、アンゼロが薄愛なる家人の爲に兀々辛勞して之を扶養したる如き此の境涯に幾し。然れともこれ猶ほ忍ぶべし、更に一步を進めて甲が

乙の爲に丙の手に殺さるゝにあらずして、甲が乙の爲に乙に殺されざるを得ざる地位に立たば如何。誰か『此れまでも忍ばざるべからざるか』の疑問を起さざるものあるべき。然して基督の置かれし地位は正しく此の地位なりき。彼は人類の爲に人類の手に殺されんとす。狭く云へば彼は『イスラエルの迷へる羊の外に遺されざる』使命を守り一生を彼等の爲に費たるに、其のイスラエル人は彼を殺さずば已まざらんとす。加之今夜敵の手に己を賣らんとする者は弟子の中にて最も愛重したる十二使徒の一人なり。夫れ死の杯は一なり、然れどもこの杯に盛られたるものの如何によりては或は蜜よりも甘き杯あり或は又苦き杯あり。死の杯は基督の覺悟したる所なれども其杯か斯くまで苦き味を以て充たさるべしとは或は思ひかけざりしならん。猶太人の無情

弟子の反逆と怯弱、約言すれば人類の罪惡を盛りたる此の杯をも傾けざるを得ざるか。若しかなは、此の杯を離つこと能はざるか。夫れ義しき人何が故に多く苦むやとの問題は人類の思想し始めてより以來、反復考究せられたる問題にして、殊にイスラエルの預言者、詩篇約百記の著者が光明を見出さんとして思を凝したる一點なり。然して累代の苦しき試煉と神靈の啓導によりて漸く達し得たる信念は即ち、義人の苦むは人に代りて苦むなり、人に苦めらるる苦き杯の底に人の爲に苦むてふ甘味を藏することなりき。これイスラエルの預言者が萬世の人心に貢献したる真理にして『苦める救主』の理想も亦次第に明になり。今や此の悠久なる問題は耶蘇の一身に集まり、數千載を費して靡けなからに端緒を捉へ得たる解釋よりも更に明白現實なる答を一夕

の間に求めらる。安ぞ大苦悶なきを得んや、涙と血の如き汗無きを得んや。然る後人に苦めらるゝてふ雲霧は解けて人の爲に苦む救世の理想玲瓏として満天に光明を放ちしならん。我等は基督の足跡に追隨して漸く此處に達せり。即ちゲツセマ子の苦悶は人の爲に死するの意識完成するまでの苦悶なること此なり。我等は今まで辿り來りたる道の大なる迷誤なきを信せんと欲す。然して此の以上如何なる方向に歩を進むべきや。或人の思ふ如くゲツセマ子の苦悶は人に代つて苦むまでの苦悶なるに併せて、此の苦悶直に人の罪の爲の苦悶なるや。予か以上説き來りし範圍内に於ても、人の爲に苦むてふことは既に含まれたりと信ず。然れとも此より以外の意味に於て、即ち基督か罪人の神より蒙るべき責を受けたるが爲に斯く苦

悶もんしたるか。或は然らん。然れども予輩よはいは未だ之に進すすむべき技折しせきを見出いす能はず。唯言たひひ得る所は、基督キリストの心は悲哀あはれの時常に最も柔やわらかに融とけ、至り盡つくせる同情まうじやうは斯る時最も盛さかんに動うごきしを見れば、獨り弟子ひとに向むかひて『靈魂たましひは冀なげふなれども肉躰にくたい弱よほさが故ゆゑなり』との同情どうじやう深こき言ことばを與あへしに止とまらず、肉躰にくたい弱よほく靈魂れいこんの光微ひかりかすかなる天下てんか萬世ばんせいの人類じんるいの境遇きやうぐうに身みを置おきて同情どうじやうを表あらわし其の重荷おもひを負おふの大愛たいあいを發起はつぎし給たまひしを。余よの知ちり得る所ところは此處こゝに止とまる、其の以上たゞしいは唯敬畏たゞしいして此の嚴肅げんしゆくなる深秘しんひを望のぞみ見るのみ。

第六章 十字架及び復活

基督キリストの一生いっせいを分割ぶんかくする轉機てんきの最後さいごとして今十字架じゅうじや上の死しに及およばんとす
 (復活くわつぷつを以て最後さいごとする方適當はうてきとうなるべけれども假かりに十字架じゅうじやと復活くわつぷつを併あせて爾しか云いふなり)。夫れ三寸息絶さんすんいきたゆれば萬事休ばんじきゆうすてふ普通ふつうの意味いみより云いへば、死しは此れ轉機てんきにあらずして結末けつまつなるに、獨り基督キリストの死しを之と一様いっやうに觀みざる所以ゆゑは、彼かれ自ら死しを以て生命せいめいと事業じぎやうの終局しゅうきよくにあらずと信しんじたること明あにして、歴史れきしの跡あとも亦之またに合あすればなり。過去かこの行程こうていは一度いちどカリバリエイ丘上じゅうじやの十字架じゅうじやに湊あまりて新あらたしき歴史れきし此これより始はじまるなり。十字架じゅうじやの意義いぎ深秘しんひを極きまむ。我等われらをして唯ただ以上の方面ほうめんより之を望のぞみ見みせしめよ。

此の方面を明にするを得ば自ら十字架の價値(斯く云ふを得ば)の幾分を明にするを得べけん。十字架の價値は彼の神性を除外して十分に考へ得べからざることを信ずれども、又一個人間的行爲として眞價ある者にてあらざるべからず。之につきて余は茲に先づ三の事を考へんとす。(一)十字架は耶蘇の進んで取りたるものなるや否、(二)耶蘇の全生涯の精神はこの一事に籠もれるや否、(三)彼が又如何なる態度を以て十字架を受けしやにあり。

耶蘇は敢て好みて荒野の誘惑を受けざりしと同じく、亦敢て好んで十字架を取らざりき。さればこそゲツセマ子の苦悶ありしなり。然り好んで十字架を取らざりしも進んで之を取れり。是の如くして進まば終に十字架の悲劇に極まらざるを得ざるを知りながら猶決然として邁

往せり。其の進路の一面は方法にあり一面は根本の主義にあり。第四福音書の記者が第二章に於て『耶蘇自己を彼等に托せず、そは總ての人を知り又人の心の中を知るが故に人の證を求めざればなり』と記し置きたるは夙く既に十字架の伏線を布けりと見るも可なり。耶蘇は事を爲す方法に於て全く自己の方寸の尺度に従ひ世人の好む所に投ぜざりき。人は彼に期するに政治的運動の首領たることを以てせり、然るに彼はこの期望に副はざりき。之が爲にガリラヤの人民は失望せり、イスカリオテのユダも功名の念酬はられざるを怨みたり。然れども衝突の主たる原因は方法よりも寧ろ根本の主義にあり。主義異なるが故に方法も亦自から異ならざるを得ず。其の主義とは耶蘇が神の子救主たる權威をば必要に臨みては大膽に又公明に主張せることなり。此の

權威に原きて彼が人の罪を赦し、新しき教を立て、新しき生活を實行し
 隨つて在來の傳説風俗に拘泥せざりしことは、猶太の宗教界の當局者
 が彼に對する惡しみを深からしめたり。終に祭司長が彼に死罪の宣告
 を與へたる罪案も亦神の子基督なることを告白したるに原けり。祭司
 長カヤバ問ふて曰く『汝の神の子基督なるか』と。耶蘇答へて曰く『然
 り人の子大權の右に坐し天の雲に乗りて來るを見るべし』と。羅馬の
 知事ピラトガ『汝は王なるか』との間に答へて、彼は、現世的の王に
 はあらざれども眞理を立證する爲に來りたる王者なることを明言した
 り。見るべし、耶蘇は偶然に死地に陥りしにあらず、又別の罪に誤ら
 れて罰せられしにもあらずして、公然として主張たる主義名分の爲に
 死せしことを。

縱令自ら進みて之を取れりとするも其人の畢生の精神と經營が此の事
 に籠めれると否との別なくんばならず。主義を重して死を輕するは世
 の志士仁人の心事なるが、基督は主義を重し又死を重ぜり。最も大な
 る主義なるかの如く死に重きを置けり。文人に最も傑作として自ら愛
 重する書ある如く、美術家に最も心血を注ぎたる作品あるが如く、耶
 蘇は十字架の死を以て、最も精神を傾けたる事業中の事業と見做せる
 は不思議にあらずや。然れどもこれ恠むべきことにあらず。十字架は
 獨り最後の日カルバリーの丘に立てるのみならずして基督一生の旅路
 には斷へずこれありき。『日々其の十字架を負ひて我に従へと教へ給ひ
 し君は亦日々弟子のそれよりも重き十字架を負ひ給ひしなるべし。終
 にカルバリー山に至りてその生涯の十字架は完成せるなり。十字架の

一面は苦みなり一面は神に對する從順なり。十字架はその從順の至り盡せるにて、一生の他の部分より孤立せる行にあらざる。彼の生の中に常に死ありしが故に死の中に生ありき。即ち生涯の志は爰に集まれり。

以上は専ら十字架を過去の生涯と相關係せる方面より觀たるものなるが、之に加へて現在十字架に臨みたる時如何なる精神態度を以て之を受けしかを考へざるべからず。何となれば死を取りし道と死を受くる道とは區別して之を觀ざるべからず。例へば醫師が傳染病を治療するが爲に之に感染して終に死することあらは其の死は職分に殉せる死にして尋常の死にあらず。然れとも其の人が其の病に處し死に處するに際して或は天を怨み人を詛ふ如き淺ましき心を以てせば其の死の價値

を失ふことなきか。之に反して普通人の身にかかる病或は損失の如き多くは偶然に來るものにして善にもあらず又惡にもあらず。然れども縦し偶然にもせよ之を受くる人の精神上の態度によりて大なる道德上の品價を生ず。抑も耶蘇は如何なる態度又氣象を以て十字架を受け給ひしか。

耶蘇の從容として苦みを忍び死に就きしは云ふまでもなし。然れとも等しく從容として死する中にも、憤然怨を吞んで死するものあり。或は又枯木死灰の如く情を殺して死するものあり。耶蘇の死に至りては然らず、最も著しきは、大難に處する心の溫和にして、行き届きたる同情と親切の圓滿に表れしにあり。人の良く知れる事ながら之に就きて四五の事實を叙せしめよ。耶蘇のゲツセマ子に在る時炬火を携へたる

捕卒彼を尋ねて來りぬ。其の先手となれるは十二弟子の一人なるイスカリオテのユダなり。耶蘇は乃ちユダに問ふて曰く『友よ何の爲に來るや』と。實にブラウニング夫人の詩にもある如く『曾て愛したり』てふ一語は人生に於て最も悲しき語なり。噫此の反逆者も曾ては耶蘇の友なりき。耶蘇は今も猶ほ友として其の良心を喚び醒ますんとす。人を棄てざる情誼の厚きは是に至て極れり。又既に縛に就かんとする際には、弟子を救護することを遺れずして曰く『若し我を尋ぬるならば此輩を釋して去らしめよ』と。祭司の長の法廷に引かれて後、ペテロの窘窮して三度耶蘇を識らずと云ふを聞き身を回して顧みたる一瞥の裡に海よりも深き恩愛は湛へられけん。又ピラトの政廳に於てピラトに對する態度を見よ。自ら裁判を受けながら却て裁判を爲せる如く堂々たれども、又ピラトの薄志弱行にして意にあらざる處置をなせるを憐れむの同情表れて『我を汝に渡せしもの、罪最も大なり』と云へり。さて彼は終夜眠らず虐待られて疲れたる身に十字架を負ひてエルサレムの城門を出て刑場に趨くや、弟子は一人も其の場に在らざりしにや十字架の一端を負ふ者は唯偶然途中にて之を命ぜられたるクレチ人シモンあるのみ。婦人等はさすがに耶蘇の傷ましき姿を觀るに忍びず後に隨ひ聲を揚げて泣けり。耶蘇は彼等を顧みて曰く『エルサレムの女よ我が爲に泣く勿れ唯己と己が子の爲に泣け。…若し青木にさへ斯くなさば枯木は如何にせられん』と。彼は自ら憐まずして此の國民の上に、此の女心に富める母等の上に来るべき不幸を憐みしなり。更に十字架上の基督を仰きて其の同情慈愛の益々此處に輝くを見よ。

々たれども、又ピラトの薄志弱行にして意にあらざる處置をなせるを憐れむの同情表れて『我を汝に渡せしもの、罪最も大なり』と云へり。さて彼は終夜眠らず虐待られて疲れたる身に十字架を負ひてエルサレムの城門を出て刑場に趨くや、弟子は一人も其の場に在らざりしにや十字架の一端を負ふ者は唯偶然途中にて之を命ぜられたるクレチ人シモンあるのみ。婦人等はさすがに耶蘇の傷ましき姿を觀るに忍びず後に隨ひ聲を揚げて泣けり。耶蘇は彼等を顧みて曰く『エルサレムの女よ我が爲に泣く勿れ唯己と己が子の爲に泣け。…若し青木にさへ斯くなさば枯木は如何にせられん』と。彼は自ら憐まずして此の國民の上に、此の女心に富める母等の上に来るべき不幸を憐みしなり。更に十字架上の基督を仰きて其の同情慈愛の益々此處に輝くを見よ。

彼の仇となれる者も平心を以て之を視る能はざりき。彼等が種々嘲弄の言を吐きしも會々以て己の良心を欺くに苦心したるを證するに足れり。其の然る能はざる人に至りては膺を拵ちて『義人なりき』と嘆息し、彼と並びて十字架に懸けられたる二人の盜賊の一人は是に至りて悔ひ改め『主よ御國に來らん時我を懷ひ給へ』と叫べり。耶蘇は最も斯の際に適切なる慰安の言を賜ひて曰く『誠に我汝に告げん今日汝は我とともに樂園にあるべし』と。此の大罪人も偶然耶蘇と同時に十字架にかけられし縁によりて思ひきや彼と俱に樂園に入るの恵を受けぬ。又十字架の下に立てる母マリアと弟子ヨハネに言を遺し母子の如く相依らしめたる注意を見よ。ランゲは之を解いて曰く耶蘇が二人の名を呼ばずして唯『此れ汝の母なり汝の子なり』と言ひしは故意と意を用

ひしことにて、其名を指して傍人に目指され或は禍を買ふことあらんことを恐れたるならんと。さもありなん。想ふに一二年の前まで母と弟妹と偕に暮したるナザレの懐かしき光景は眼前に浮びたるべきも、思の専ら注ぐ所は過ぎし日の名残よりも先づ現在將來の慮にてありき。耶蘇は斯の如き態度を以て十字架を受け給へり。然して其の人を憫み人の爲に慮る慈愛は、敵の爲に赦しを求むるに至りて絶高の點に達せり。彼が十二時頃十字架に懸けられし時第一に發したる言は『父よ彼等を赦し給へ其の爲す所を知らざればなり』との祈にして、最後の言も亦『父よ我が魂を爾の手に委ぬ』との祈なるが、此の最後の祈を爲す前に『我が事畢りぬ』と云ひ給へり。『我が事』とは何ぞや。之を説明するものは第一の祈にあらずや。基督一代の事業は罪人の爲に赦

罪を神に願へる此の一語に集れりと云ふも可なり。然かも一步を進めて此の祈の説明を何處に求むべきか。罪の赦してふことは最も寛大にして又最も嚴格なる行爲なり、愛と義の最も圓滿なる調和を要することなれば、充分なる理由なくして之を神に求むることあるべからず。『彼等其の爲す所を知らざる』も一の理由なり。然れども此は唯罪の酌量せらるる理由にして赦さるべき理由としては未だ十分となすべからず。是に於て彼が晚餐の席上にて語りたる『此れ新約の我が血にして罪を赦さんとして衆の人の爲に流す所のものなり』との一言は正に此の疑問の答となすべきものなり。何が故に耶蘇の血が罪の赦しの理由となるかてふ深秘は神學上の問題に屬すれば余が今入らんとする領分にあらず。然れども少くとも耶蘇自身の意識に於ては、彼の死と人

類の罪の赦しとは親密なる關係を有するを信ぜしことだけは明白なりとす。然してこれは自から作爲したる道理にあらずして天父の彼に示現したる大經綸に原けり。彼は嘗て言へり『父は子を愛して總て行ふことを彼に示す』と。今や十字架を中樞として人類の運命が一大回轉を爲しつゝあることは耶蘇の目に映されて、彼は満足なる犠牲をは満足して献げしならん。耶蘇の十字架を受けし精神は斯の如し。然して十字架を受けし道理も亦是に外ならず。猶ほ云ふべきことあり。耶蘇は其の慈愛同情によりて殆ど肉體の苦痛を忘れしが如くなれども、彼は精神を以て肉體の痛苦を忍ぶ魔酔劑と爲さず。初め彼が十字架に懸けられんとする時、『醋に膽を和せて耶蘇に飲ませんとしたりしに嘗めて飲むことをせざりき』とあり。此は一

種魔醉力を有する飲物にして、痛苦を忍び易からしめんとて刑人に與ふる習なるに、耶蘇は嘗めて其の然るを知るに及んで之を辭したり。鈍らざる感覺を以て苦痛を受け給ひたる覺悟を觀るべきなり。然して十字架上の苦痛は耶蘇が『我が神我が神何ぞ我を棄て給ふや』と叫びし時に於て絶頂に達せしならんと想はる。固より此の言は單に肉體の苦痛の爲に發せられしにあらざることは明にして、救主としての意識に關係あるべしと雖も、兎に角肉體に於て又精神に於て死其の物と相面接して苦闘ありし一刹那なりしを知る。人の死する前大なる苦悶あり其後須臾の平和あり。肉體が最後の抵抗を試むる時苦悶あり其の抵抗の去りし後平和あり。耶蘇も最後の戦を経て後肉體は死の力に服したり。然して精神は死の力に勝てり。此の時一時天地を包みし晦冥の

色も又耶蘇の心を包みし暗雲もともに解けて限り無き平和に復り、『我が事の畢れる』に安じ祈りを以て其の瑕なき靈を天父の手に托し給へり。

耶蘇が『父よ我が魂を爾の手に托ね』と祈り給ひし時、彼を甦らす力ある父として之に托し給はざりしか。夫れ耶蘇は常に十字架の後にあらずば其の教訓徹底せず事業も完成せざることを感じたるが如し。然れども十字架の後は復た世に在りて訓を垂ること能はざるを如何せん。若し出來得べくんば暫時世に留まり、十字架の前に説く能はざりし所を十字架の後に説明し、預言として語りし所のものを歴史として説明することを許されんことは彼の素願にあらざりしや。又想ふに基督の世に在るや敵は八方より彼を覗ふあり、枕を安ずべき地なく前

途には十字架の暗影横はるありて其の成し遂げらるるまでは我が痛み
 いかばかりぞや』と云はれし心中察するに堪へたり。若し出来得べく
 ば十字架の大難を受け終り神より托せられたる使命は之を果たしたる
 後、若し斯かる譬喩を用ゆるを許さるれば、學生が試験を畢へて將に
 故郷に歸らんとするに際して猶數日學窓に留まりて友とともに打寛ぎ
 て過す如き有様にて暫時世に在らんことは、彼が十字架の決心とと
 もに心に藏められたる願にあらざりしや。然して此の願は果たされぬ。
 十字架にかゝりし日の夕耶蘇の屍は愛する者の手によりて十字架より
 取り外され、懇に香料を塗られて或る花園の内にある墓に葬られし
 が、中一日を隔てたる朝早く、彼を信ずる婦人等其の墓に詣りしに、
 墓は開かれて耶蘇の屍は在らざりき。

福音書の記者をはじめパウロの、齊しく記する所に據れば基督は復活
 せり。其の後四十日の間は世に留まり、弟子と往來して之を教へぬ。
 彼はエマヲの村に行ける二人の弟子に現れて、「預言者のすべて言ひた
 る事を信ずる心の遅き愚なる者よ基督は此等の難を受けて後其の榮光
 に入るべきにあらずや』とて聖書の中に自己に就きて記されたる事は
 之を解き明せりと云ひ、(路二十五〇廿五以下)。又十一人の弟子の居る
 處に現はれて彼自身の死と復活の意義を説明し、終に此の教の萬國に
 宣傳せらるべきことを語り示せりと云ふ(路二十四〇四十四以下)。番
 に彼等を教訓せしのみならず彼等と食を偕にし一度はガリラヤの故郷
 に歸りて幾多の追懷を留むる某山某水の間に弟子と偕に數日を送り、
 終に復橄欖山上のベタニヤ村より昇天せりと傳へらる。ベタニヤは耶

蘇の最も愛したる家庭なるマリヤ、ラザロ一家の住める里なり。耶蘇の公生涯は其の親戚たり友たるヨハ子の洗禮を施したるヨルダン河東のベタニヤ村に始まりて、今又『我か友ラザロ』の住めるベタニヤ村に終りしなり。凡そ福音書の著者が復活の事を記せる文章を讀むに單純美麗にして、平和の色溢るるばかりなり。世に死者の甦へりたりと云ふ類の物語が多く怪奇の分子を含み恐怖の念に訴ふると異にして、讀者をして其の事實の記録たるを感ぜざるを得ざらしむ。

余は茲に復活の事實を論證するの餘地を有せず。然れども章を逐ふて叙し來りたる事實の聯絡と教訓の論理は自から復活の論證として最も力あるを信するものなり。基督の生涯は是の如く轉折し來り其の教訓は是の如く發展し來りたる後、この最後の轉機と發展の無かるべから

ざる内部的の道理甚だ強固なり。故に基督も復活せし後、弟子の過去の記憶追懷に訴へて復活の事實を信ぜしめんとせしなり。以前の聯絡斯の如し、更に以後の聯絡より云ふも、此處に此の大事實を置かずば、弟子の精神信仰に起りたる非常なる變化をば何を以て説明せんとするか。

基督の地上の生活に於ける轉機は弟子の生涯の轉機を造り、更に又世界の歴史か未曾有の大回轉をなす原動力となりぬ。

明治三十六年五月十一日印刷
明治三十六年五月十四日發行

(定價拾五錢)
郵稅貳錢

著者

柏井園
東京市芝區白金臺町二丁目四十九番地

發行人

堀田達治
東京市京橋區銀座四丁目三番地

印刷人

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町二十六番地

發行所

教文館
東京市京橋區銀座四丁目三番地

印刷所

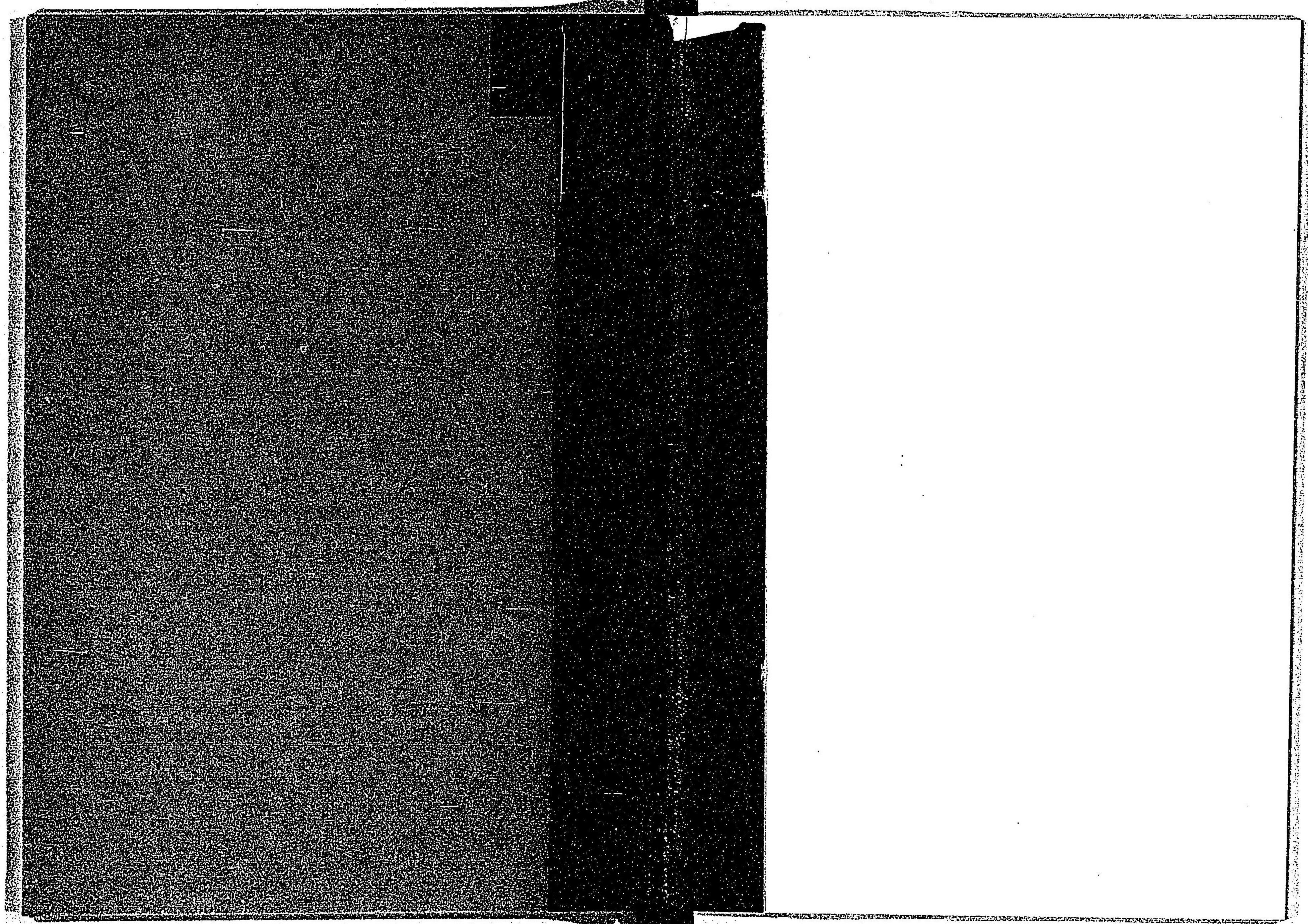
株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十六番地

大賣捌所

東京竹川町 小樽醒書社
東京本郷

東京神田 中庸堂

5-49



3
7